昭和48年3月18日発行通巻104号(毎日曜日発行) 昭和48年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

朝日=ラルース

3/18
220円

103

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

総監修
岡田　要　日本学士院会員
末廣　恭雄　東京大学名誉教授
古川　晴男　前東京学芸大学教授
宮地伝三郎　京都大学名誉教授
山階　芳麿　山階鳥類研究所理事長

編集委員
阿部　宗明　農林省東海区水産研究所技官
上野　俊一　国立科学博物館研究官
浦本　昌紀　山階鳥類研究所所員
小原　秀雄　女子栄養大学教授
日高　敏隆　東京農工大学教授
堀越　増興　東京大学海洋研究所助教授

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（２），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《１～128号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表３「本誌の購読について」をごらんください。

目　次

世界動物百科　第103号

表紙　オオジシギ　　撮影　高野伸二
表２　**日本迷鳥録**　カタジロワシ

監修　高野伸二（日本野鳥の会理事）
翻訳　大友徳明（流通経済大学助教授）

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注１〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 37

カタジロワシ

Aquila heliaca

文　内田康夫
え　木村しゅうじ



カタジロワシは，前に扱ったカラフトワシに似てやや大きく，全長約80センチ，バイカル湖以西からスペインにかけてのユーラシア大陸中部に分布する。わが国ではたった１回，岩手県宮古で採集例があるにすぎない。全身暗褐色で，つばさのつけ根だけにくっきりとした白色部があるが，スペイン産の亜種は，つばさの前縁に沿っても白色部がひろがっている。

このカタジロワシとカラフトワシ，それに留鳥として日本各地の山岳部に生息するイヌワシの３種が，日本で記録されたイヌワシ属のすべてである。同属のワシ類は他にいくつかあり，分布は全世界にひろがっている。かれらは，魚食性のオオワシやオジロワシなどのウミワシ類と異なり，哺乳類を主食とするヤマワシ類である。

ワシ類は，生態学的につねにその地域の王者の位置を占めているが，このことは同時に，環境破壊の影響をもっとも受けやすい立場にあることを意味している。■

© 1973 ASAHI SHIMBUN, Tokyo, pour la langue japonaise · Librairie LAROUSSE, Paris · RIZZOLI EDITORE, Milan.

私たちの仲間
103号…3月18日

ピグミーと動物と
下 自然人のこころ

酒井傳六 写真も

ピグミーの接触する動物は，陸上で生活する動物（哺乳類や爬虫類）にかぎられているわけではない。魚も鳥もまた，ピグミーの世界に生きている。熱帯アフリカが森と川の地域であることを思えば，ただちにこのことは理解できるであろう。

ザイールのザイール川（コンゴ川）を筆頭に，カメルーンのサナガ川，ガボンのオゴウエ川が主たる河川であり，そこに注ぐ支流の数がおびただしいものにのぼるのである。ザイール川の場合，ピグミーの主たる居住地，「イツーリの森」にはザイール川支流としての「イツーリ川」が流れている。「イツーリ川」の名から「イツーリの森」の名が生まれたのである。

男は狩猟，女は漁労

狩猟が男の仕事であるのに対して，漁労は女の仕事である。こんにち，船に乗り，ヨーロッパ人の持ちこんだつり針が使われることがあるといっても，伝統的方法を彼女らが捨てたわけではない。動物の骨あるいはトゲヤシのトゲを使ってつり針がつくられる。コイ，カピテーヌ（と現地で呼ぶ特有の川魚），カメをはじめとして，小魚も漁労対象となる。いくつかの方法を示せば――。

小川では石を円陣に並べ，一方に口をあけておく。上流と下流から魚を追いたててこの円陣に追いこみ，口を閉じて捕える。夜の漁も行なわれる。燈火を見て集まってくる魚を円陣のなかに誘いこんで捕える。川の流れがゆるやかなときは，まず，川を土でせきとめてふたつの流れとする。次いで，一方の流れを完全に止め，そこの水を急いで他方の流れのほうに移す。水が浅くなったところで，どろのなかを探り，魚を捕える。この流れで漁労が終わると，今度は別の流れで仕事を始める。あるいはまた，乾季の場合には，沼のなかにいくつかの深い穴を掘る。魚はそこへはいり姿を隠す。乾燥が進むと，他の地面には魚はおらず，すべて穴のなかに集まっている。それをピグミーの女たちは捕える。

また毒物による漁労も行なわれる。この仕事の場合だけ，男が引きうける。ただし，この方法は早く流れる川では効果をもたず，沼あるいはきわめてゆっくり動いている水のなかで有効となる。毒性の木の枝あるいは葉を使い，水を毒性にし，魚を麻痺させるという方法である。ガボンのピグミーは８種の毒性植物をこの方法に使う，とトリーユ神父は報告している。

魚をたたえる歌

漁労でもまた，ピグミーは，捕えた魚をたたえて歌を歌う。ムボイという名の，もっとも味のよい魚の場合は，その歌詞は次のとおりである。

御身が長い間森を歩きたいならば，
そして強い心臓を感じたいならば，
また，たくましい胸の盛りあがるのを感じたいならば，
そして御身の足が早く走るのを欲するならば，
友よ，赤々と燃えた炭火のうえで焼け。
危険な歯をもつウオン（魚の名）を，
さまざまの色のコイを，
ともにみごとな味をもつそれらの肉を。

もし御身が静かな眠りを望むならば，
静かに御身のまぶたを閉じて願うがい い。
死者の使いである幸運な夢があらわれて，
首尾のよい狩猟を御身に告げることを。
暗い森のなかの格好な場所の川のそばで，
敏捷なイノシシが休んでいるのを知らせることを。
鋭敏な耳をもつアンテロープが，
森の空地で休んでいるのを知らせることを。
友よ，シゴル（サカナの名）の肉を，
それを包んだ葉のままで焼け。

しかしながら，悔いなきまでに，
御身の心を喜ばせたいと欲するなら，
そして御身の胃袋が満足することを望むならば，
じゅうぶんに食べた，うまいものを食べた，
というがよい。
もし御身の腹がじゅうぶんにふくれ，
それを押す指をはねかえし，
張りきったタムタムのように鳴るのを，
御身の腹が歓喜の歌を歌うのを，
御身が欲するならば，
友よ，ムボイをとれ，友よ，ムボイを食べよ。

動物を中心とする円環

ここでは『ゾウの歌』の第一段階にみられるような，鎮魂の調子はあらわれていない。ピグミーが陸上で生活する動物と水中で生活する動物とを，評価のうえで区別していることは明らかである。鳥はどうかといえば，ピグミーは決して鳥を狩猟せず，決して鳥を食べない。このことはいかに理解すべきであろうか。トリーユ神父は，これはたぶんかつて鳥が聖獣として扱われていたことを意味すると述べている。わたし自身，ザイールのピグミーに接近した経験からいえば，答えは別である。つまり，鳥は狩猟に値しないのだ。第１に鳥を射ちおとすのはむずかしい。第２に，それにもかかわらず，射ちおとした鳥の肉はきわめて少ない。一方，鳥が聖獣であったとしたら，「ゾウ神話」のような神話があってしかるべきであるのに，それはガボンにおいてもザイールにおいても存在しない。

このように見てくると，ピグミーにとっての動物は，陸上で生活する動物であるということが明らかとなる。実際，ピグミーの生活と考えは陸上の動物を中心として円環をなしているのである。その意味はこうだ。

文明人の考えかたの特徴のひとつは，目的と手段を区別することにある。食うために生きるのか，生きるために食うのか，という命題をはじめとして，休むために働くのか，働くために休むのか，あるいは狩猟のために踊るのか，踊るために狩猟するのか――，といった区別のしかたがそこにある。それは直線的であ



ゾウの踊り

り、分断的である。

ピグミーはといえば、かれらは目的と手段の区別をしない。踊ること、話すこと、火をたくこと、料理すること、子を産むこと，狩猟すること，採集すること，弓の訓練をすること，毒矢の製作をすること——，それら生活のすべてが一体となって生の意味を形成している。そこには一義的なもの（目的）と副次的なもの（手段）の区別がない。それは円環的生活、円環的思考と名づけてよいユニークなものである。生のよろこびが生じているのは，明らかにこの円環性からである。すべての時間，すべての行為が，無差別の価値と充実をそなえているのである。

かれらが，いかにおのれの能力を動物に対抗できるまでに鍛錬するか，ということも，この視点から考察されなくてはならない。かれらは踊りでも木登りでも走り方でも，動物のまねをしようとする。

それは，自分にとっての楽しみであり，仲間にとっての喜びであり，狩猟に際しての効果の基礎であり，動物に対する親愛の表明でもある。目的はどれか，と問うことはムダである。すべての行為は円環的なのであるから。

残酷さと優しさと

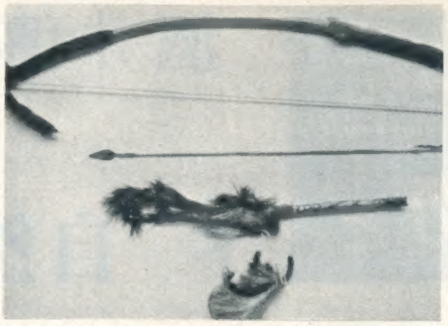
動物に対抗する能力を，動物をまねることによって鍛錬する——という面に少し目を注いでみたい。

すでに記したように，ピグミーの歌と踊りの主題のほとんどは，陸上に生活する動物である。『チンパンジーの踊り』は３人のピグミーが腰をおとし，手を巧みに振り，チンパンジーが森のなかで食物を捜しているしぐさを演ずるものである。長い時間，腰をおとして，同じ高さで，早い足さばきで動くことは，森のなかで狩猟の際に，ピグミーにとって，しばしば必要である。その能力は，この踊りによって表現され，踊りによって鍛錬される。木登りはどうかといえば，ピグミーはサルのように登る。腹を幹につけてではない。腹を浮かせて，手と足で，まるで地面に倒した木の上をはっていくような姿勢で，軽々と登る。高い木の枝から下がっているツル科植物を登るときも，するすると登る。大人だけではなく，10歳ぐらいの少年も，同じようにやることができる。

このような能力を身につけたピグミーは，不意に樹上からゾウにとびかかり，あるいは，樹上で射たれて落ちてこないサルをとらえるために登り，あるいはまた野獣の逆襲を避けるのである。また，アンテロープの鳴き声も，ピグミーの得意とするところである。鼻を指でつまみ，ミンミンゼミの調子をゆるやかにしたようなその鳴き声は，森のなかでは，ときとしては勢子の力よりも有効である。チンパンジーの声もまた，ピグミーはみごとにまねる。

このような訓練によって動物の能力を身につけるかれらが，動物を，射つべき相手としてのみ意識しているのでないことは，すでに記したとおりである。共生者としての，仲間としての動物認識が同時に存在するからである。ピグミーが，動物の毛皮を道具の装飾に使うとき，この認識（あるいは感情）が作用しているのを，わたしはザイールのピグミーとの接触で感じた。

ほとんどのピグミーは，弓の両端をサルの尻尾で包んでいる。それは第１に，装飾としての美的効果をもっている。第２に，弓の両端部を保護するという実際的効果をもっている。第３に，それはサルを射った能力を示すしるしである。しかし，これらの具体的な効用とは別のもの，つまりサルへの親近感がここで示されている。サルに親近感をもつなら，なぜサルを殺すのか，というのは単純すぎる問いである。



ピグミーの狩猟道具一式
上から弓、矢、笛、プロテクター

ピグミーの狩猟は，遊びのためでもなく，スポーツのためでもないことを知りさえすればよいだろう。そして，にもかかわらず，動物にこのような感情をいだいているという優しさに，われわれは注目すべきであろう。

サルの尻尾はまた笛の吊り紐の役をも果たす。踊るときも，森で狩猟中の合図のときも，笛係りのピグミーは，吊り紐を首に回して笛を携行する。また，弓を射つときの弦の反動を受けるため左手首につけるプロテクターも，動物の内臓でつくったものである。万物活用の精神とくふうをそこにあらわしていると同時に，ピグミーはそこに動物への愛着を示している。ピグミーは，どこで，いつ，どんな大きさのサルをしとめたかを記憶している。殺すという残酷さと同時に，記憶するという優しさが，この狩猟民のなかに生きているのである。

キリスト教の動物観

このピグミーと動物の関係から，わたしがキリスト教と動物の関係を連想しても逸脱ではないであろう。なぜなら，一般的認識では，文明・ヨーロッパ・キリスト教という三者一体のイメージが存在するからだ。

聖書を読んだ者なら，だれでも気づくことだが，そこには，自然と生物に関する記述があるにせよ，自然と生物に対する愛は記されていない。『旧約聖書』の創世記は万物創造を記したくだりで，生物を創造した最後に人間をつくり，人間をこれら生物の支配者としたことを述べている。『新約聖書』のマタイ伝は自然と生物を語っている。しかし，「思いわずらうな」の教訓材としてである。

アッシジの聖フランシスコは自然と生物に対する愛によって知られている。しかしかれはその点では例外的キリスト者であった。例外的であればこそ，これほど著名になっているのである。熱帯アフリカのガボンで病めるアフリカ人のために一生をささげたアルバート・シュバイツァーの場合はどうであろうか。しかし，かれの生物愛の思想はキリスト教から生まれたものではない。ストイックなインド哲学の影響からかれの生物愛が生まれたことは，すでに天下周知のことである。

だから，アメリカの生態学者，ピーター・ファーブ氏は著書『生態』のなかで次のように記さねばならなかったのである。

「アジアの仏教には自然のすべての生命を崇拝し，残虐な行ないをいましめ，動物を愛護するという教えがある。……西欧人にとって，このような思想を感傷的だとか馬鹿げていると嘲笑することはたやすい。しかし，アルバート・シュバイツァー博士は，自然のすべての命をたいせつにしようとする思想に共鳴して，『これまでのすべての倫理学の大きな欠点は，人間と人間との関係だけを扱えばよいと信じてきたことである』と述べている」（坂口勝美訳＝タイムライフインターナショナル）。

殺生に鈍感な西欧思想

立原正秋氏の小説『聖クララ村』はキリスト教徒と動物の関係を描いたものとして興味深い。ヨーロッパ人の作家がこのようなことを扱わないのは，そういう問題に鈍感となっているか，あるいは避けて通っているかの，どちらかであろう。『聖クララ村』の冒頭部は次のとおりである。

「おまえさん，そこの療養所にいるのかね？」

老人は海面の浮子をみつめたままぼくに訊いた。

「そうですが」

「どっちのほうだね。手前の海岸サナトリウムかね，それともクララかね？」

「クララですが」

「そうかね……なんだな，あそこの黒い服をつけた尼達ァ，むごたらしいな」

「どうしてですか？」

ぼくも浮子をみつめて問いかえした。老人の言葉にきびしい調子がふくまれていたので，ぼくは内心すこしばかり反撥を感じていた。

「なによ，ついこのあいだのことだがね，暁方に俺らがここで釣っていたら，風のあった後だったので，二百匁の石鯛を釣りあげたばかりのところだったがね，尼が二人おりてきてな，奴らは，白い布の袋をかかえていたが，袋のなかから小犬のなき声がしたよ。みていると，奴らはものもいわずに，はずみをつけて袋を海に投げこんだ。あまっ子のちからだからそう遠くへは投げこめない。ところがおめえ，投げこまれた袋が浮いてこねえじゃねえか。犬のなき声がしたのは俺らの気のせいで，あるいは汚れものを投げこんだのかも知れんとはかんげえたが，しかし腑におちんのでな，尼がけえっちまってからちょうど半蔵の舟が通りかかったので，竹竿で袋をあげてもらっ



チンパンジーの踊り

た。袋をあけてみたら，小石がつまっていて，そのあいだに生まれたばかりの黒い小犬が死んでいたよ」

同じ作品のなかごろには，修道女と信者がヘビと子イヌを焼却炉に投げこむ場面があり，おわりのほうには，焼き殺されようとしている子イヌを救いだす別の患者の行為が描かれている。立原氏は鎌倉のカトリックの病院の患者の話からこの作品を書いたと述べている。ここに描かれたようなキリスト教徒の態度は，ベトナムで人間のほかに化学兵器で自然と生物を大量に殺しつづけたキリスト教徒の大統領の行為とつながっているように思われる。なぜなら，そこには，殺生に対する苦痛と倫理感がまったく欠けているからだ。これにくらべて，ピグミーの動物観ははるかに高いと，思わずにはいられない。

トーテミズム12か条

ピグミーと動物との関係がそれほど特別であるなら，ピグミーはトーテムをもち，トーテミズムを守っているにちがいない，とここで想像する読者は少なくないであろう。1791年に白人旅行者が北アメリカのインディアンをたずねて「トーテム」ならびに「トーテミズム」を外部社会に紹介して以来，多くの報告と研究が発表された。オーストラリアとアフリカが主たるフィールドである。初期の学問的開拓者としてイギリスのジェイムズ・フレイザーがあり，こんにちの専門家としてフランスのクロード・レヴィ＝ストロースをわれわれは知っている。多くの学者はトーテミズムを一定の条件をもつ普遍的実体とみるが，他方に，これは研究者のつくりあげた幻影にすぎないと説く者もある。

サルのように
ツル科植物をつたって木をよじ登っていく少年



わたしは，動物と直結した原初的形態としてのトーテミズムそのものの存在を認定した上で，話を進める。

各地域によって，さまざまの変化があるにせよ，今世紀はじめにフランスの言語学者・考古学者，サロモン・レナークが発表した『トーテミズム法典』12か条は，トーテミズムの基礎条件を示している。それは次のように記している。

①ある種の動物を殺したり，食べたりしてはならない。人びとはそういう種類に属する動物を飼育したり，保護したりする。

②偶然死んだ動物は，哀悼の意を表されて，同種族の人間と同様な尊敬を払われたのち，埋葬される。

③食用禁止はときとして動物の身体の一定部分にしか課されない。

④日ごろ愛していた動物を，やむを得ずして殺す場合は，これに謝罪して，タブー違反，つまり殺生の罪を，さまざまの欺瞞や遁辞によって緩和する。

⑤動物が儀式の犠牲に供せられる場合は，哀悼の式があげられる。

⑥ある種の儀式とか宗教上の礼式が行なわれるとき，一定の動物の毛皮が着用される。

⑦種族または個人は，動物の名まえ，ことにトーテム動物の名を自分の名とする。

⑧多くの種族の者が動物の姿を紋章として用い，またそれを武器の装飾とする。男たちは動物の姿を身体に描くか，イレズミにする。

⑨おそろしい危険動物がトーテムとされている場合，その名をもつ種族の人に対し，この動物といえども危害を加えないものとされる。

⑩トーテム動物は，その種族の者を守護し，警戒する。

⑪トーテム動物は，それに忠実に仕える人びとの未来を予言し，かれらの指導者としての役目を果たす。

⑫あるトーテム種族の成員は，往々にして自分たちがトーテム動物と共通の祖先という紐帯で結ばれているものと信じている。



アンテロープの鳴き声を
巧みにまねる

ピグミーとトーテム

わがピグミーの場合，事情はどうなっているであろうか。ガボンのピグミーについて調査したトリーユ神父は，「トーテムを民族トーテム，部族トーテム，氏族トーテムに区分した。かれは，ガボンのピグミーの隣人であるファング族の伝承が，"むかしむかしピグミーはひとつの民族をなし，ひとつの民族トーテムをもっており，そのトーテムはワニであった"，と述べていることから，ピグミーははるかな古い時代に民族トーテムをもっていたかもしれぬと記しながらも，伝承は伝承以上の証明力をもたぬと書いている。部族トーテムはどうかといえば，これまた伝承部分には認められるものの，現実には存在しないことを，かれは知った。ただ，部族の歌のひとつに，次のような『ヘビへの賛歌』があり，これが部族トーテムとしてのヘビの痕跡であろうかとかれはいぶかった。

夜のなかに足をおろし，
身をちぢめ，立ちあがり，咬みつくものにぶつかるとき，
おお，われらの父，部族の父，ヘビよ，
御身の子であるわれらは，
それが立ちあがってぶつかる枝であるようにしておくれ。
鋭い歯をもった御身の子でないようにしておくれ。
おお，部族の父よ，われらは御身の子。

氏族トーテムについては事情は違っていた。トリーユ神父の接触した氏族はすべて，それぞれが固有のトーテムをもっていることを認めた。そのトーテムは陸上に生活する動物か鳥か魚かであった。「氏族トーテムの動物の場合，それはわれわれの接触したすべての氏族間で，たいして変わっていない。この点についてはピグミーはかなり実用家であるようにみえる。なぜなら，かれの氏族トーテムは，もっともしばしば，射ちとりにくい動物であるか，肉が悪臭または悪い味のために食べにくい動物であるからだ。それらは腐肉を食うハゲタカ，チンパンジー，ワニ，イグアナ，アリクイ，センザンコウである。そして，イノシシ，アンテロープ，ゾウ，カバ，カメがトーテム名になることは決してないのである」

トーテムはなかった

わたしが直接に接触したザイールのピグミーの場合はどうであったかといえば，それは次のようなものである。

モンオヨの森のピグミーは，エフェ族（部族）に属しており，その氏族名はマリビである。しかし，エフェという用語も，マリビという名称も，動物起原をもつというしるしはなかった。ピグミーはそれらの名称の由来も意味も知らず，ただ他と区別する名称として知っているだけであった。トーテムに由来する部族名，氏族名であるなら，それが忘れ去られるということはあり得ないであろう。したがってわたしはトリーユ神父の氏族トーテムの報告とは逆の結果を得たのであった。

動物としてもっとも尊敬されているのはゾウであり，『ゾウの踊り』（およびその歌）はピグミーをもっとも興奮させるものであることは明らかであるが，ゾウを射ってはならぬという決まりはない。射ってはならぬという動物は，ピグミーにはない。

約100人の氏族の成員の名に，動物の名を採っているものは1例もなかった。「メデュ」という名の男があり，その名は，アンテロープを意味する「メディ」という用語と似てはいるが，それは外来者のわたしの耳に対してそうなのであって，かれら自身の耳では完全に異なる音であり名であった。つまり，その男の名は，アンテロープとは無関係なのであった。

氏族のなかのほとんどの男が，もっとも重要な武器である弓をサルの尻尾で飾ることは，一見，トーテム動物を示しているようであった。しかし，愛着のあるサルとトーテムのサルとはまったく別のものである。

一方，ザイールのピグミーの研究者であるイギリスのコリン・ターンブル氏は，その著『森の民』のなかでトーテミズムに言及していない。以上のような状況から，わたしはピグミーには（少なくともザイールで見たピグミーには），トーテムもトーテミズムも存在しないという結論を出してよいと思っている。■

アマゾン動物記 15

伊沢紘生

巨大なネズミたち


アグーチ

≪なんだ、グアラか≫

カウカヤ川の中流にブラスウェロ川と呼ばれる細い脇流がある。そのほとりの廃屋にキャンプして、わたしたちはアマゾンでのサルの調査を開始した。数日たった8月7日のことである。わたしは案内人のフアンと森へ出かけた。森のなかには猟師の切った道がずっとつけられていた。道といっても、下ばえや低木の枝をマチェテで切り払っただけで、フアンだからそれが道だとわかるのであって、わたしひとりではとうてい迷わずに歩けるようなしろものではなかった。

森のなかは雨雲が近づいてきているせいか薄暗く、なにかざわついた感じだった。あたりにサルのいるけはいはまったくなかった。小さい流れを3つとび越え、きたならしい湿地をどろどろになりながら2つくぐり抜けた先が低い丘になっていて、その上は下ばえが少なく、林床はわりあいに透けていた。

わたしたちはそこでひと休みした。一服しているとき、ついてきたフアンのイヌが前方へ走っていき、ゆるい斜面を駆けくだってほえたてた。断続的なイヌの鳴き声はいったん遠ざかり、斜面の下方をぐるっと巻くようにして、しばらくしてこちらに向かってきた。フアンは立ちあがって声が向かってくるほうに銃を構えた。そのとき、小さい黒っぽい動物がわたしから15メートルぐらいの所を走り抜けていった。

「やっぱり、グアラか」

フアンはまた腰をおろした。

わたしはここに2週間余りいたが、ブラスウェロ川のほとりの森にはサルはあまりすんでいなかった。そのあとサルの調査に適した場所を求めて長いこと旅を続けた。そしてその間に歩きまわったジュビネト川中流の森でも、バヤ川上流の森でも、カグワン河下流の森でも、案内してくれた猟師たちからグアラという動物の名まえを聞いた。それはいつもこんな調子だった。

森を歩いていると、イヌたちがほえて茂みのなかへとび込んでいく。猟師はイヌの声に注意を傾けるがすぐに、なあんだという顔をする。

「なにを追いかけているんだ」

「グアラだ」

どの猟師もグアラにはほとんど関心を示さなかった。そしてそのいずれの場合にも、グアラはわたしの視界にはとび込んでこなかった。

≪哀れっぽい動物≫

グアラの正体をはっきり確かめたのは12月1日のことだった。早朝の森のなかは静まりかえっていた。わたしはひとりであたりに気を配りながら一歩一歩注意深く歩いていた。しばらくいったとき、右手前方からカサカサカサカサッという小動物の小走りに歩く音を聞いた。その音はいったん止まり、また近づいてきた。そして太い幹の後ろからちょこんととび出してきた。40〜50センチメートルぐらいの大きさの、やや黒みを帯びた茶褐色をしたネズミのような動物だった。わりあいに大きな耳とパチッと見開いた目、あるかないかわからない尾、ウマとウサギのあいの子のような哀れっぽい表情をした動物、わたしはそれがアグーチであることを知った。やつはそこで落ちつきなく一瞬きょろきょろし、すぐに姿を消した。

アグーチ（*Dasyprocta aguti*）は、通常単独で生活し、朝や夕方におもに行動するといわれている。アグーチのおもな食物は木の実や草だが、しばしば畑のユカ芋やバナナを食い荒らすことがあるという。ホボに聞いたら、アグーチの肉を食べる人たちも多いが、自分の知っている人たちはあまり好んで食べないということだった。しかしアマゾンにすむジャガーやオセロットやタイラや、その他あらゆる種類の肉食獣にとってはアグーチは欠かすことのできない動物であり、アマゾンからアグーチをとり上げてしまったら肉食獣たちはとたんに飢えに苦しむことになるだろう。

≪ボルーガは射たれる≫

アグーチと違って同じ科（オオテンジクネズミ科＝ *Dasyproctidae* ）に属するパカ（*Cuniculus paca*）はプトマヨ水系でも、カケタ水系でも肉が好まれ、よく射たれていた。

ジュビネト川へ調査にいったときの帰り、プトマヨ河のほとりの開拓者の家へ立ち寄ってひと休みしたときのことである。家の奥の炉に大きなナベがかけられており、煮立っているナベのなかからは皮がはがれかかった四角ばった頭がひとつのぞいていた。わたしたちは家の主人から、このパカの肉を少しわけてもらい、帰りのカヌーのなかで石油ストーブにかけてスープにして食べた。少し分けてもらった肉のほとんどが皮の部分であったせいでも、それを薄味のスープにしたせいでもあろう、肉の臭みがあまりに強烈で、おせじにもうまいなどといえるものではなかった。

パカは、現地では一般にボルーガと呼ばれている。薄い褐色をした胴体の両側に、白い横筋が4本ずつはいっている。大きいのになると、体長80センチ、体重10キロを越えるやつがいるという。川や沼のほとりで生活していて、泳ぎもじょうずで、水辺の草や茎や根を常食にしており、落ちた木の実を拾って食べるという。

現地の人たちは月のない夜、小さいカヌーを手漕ぎであやつりながら、懐中電燈で岸の水ぎわを照らしていく。岸近くの浅瀬にはいろいろな魚が休んでおり、それをもりでついてとる。そういうとき、しばしばライトを浴びて岸の茂みからボルーガのだいだい色の大きな目が光る。その光る目をねらって射つ。わたしは何回かかれらのお供をして闇夜に魚突きやボルーガ射ちにいったが残念ながら一度もボルーガに出合うことはできなかった。

ボルーガは夜、それも単独か、せいぜい2,3頭で行動している。萩野さんと佐藤君がプトマヨ河右岸の支流、ペネージャ川へ予備調査にいったとき、上流から下ってきた小さいカヌーのなかには7頭のボルーガが射止められ、むぞうさにころがされてあったという。現地人のだれもがボルーガの肉がいちばん手に入れやすいといった。

≪世界最大のネズミ≫

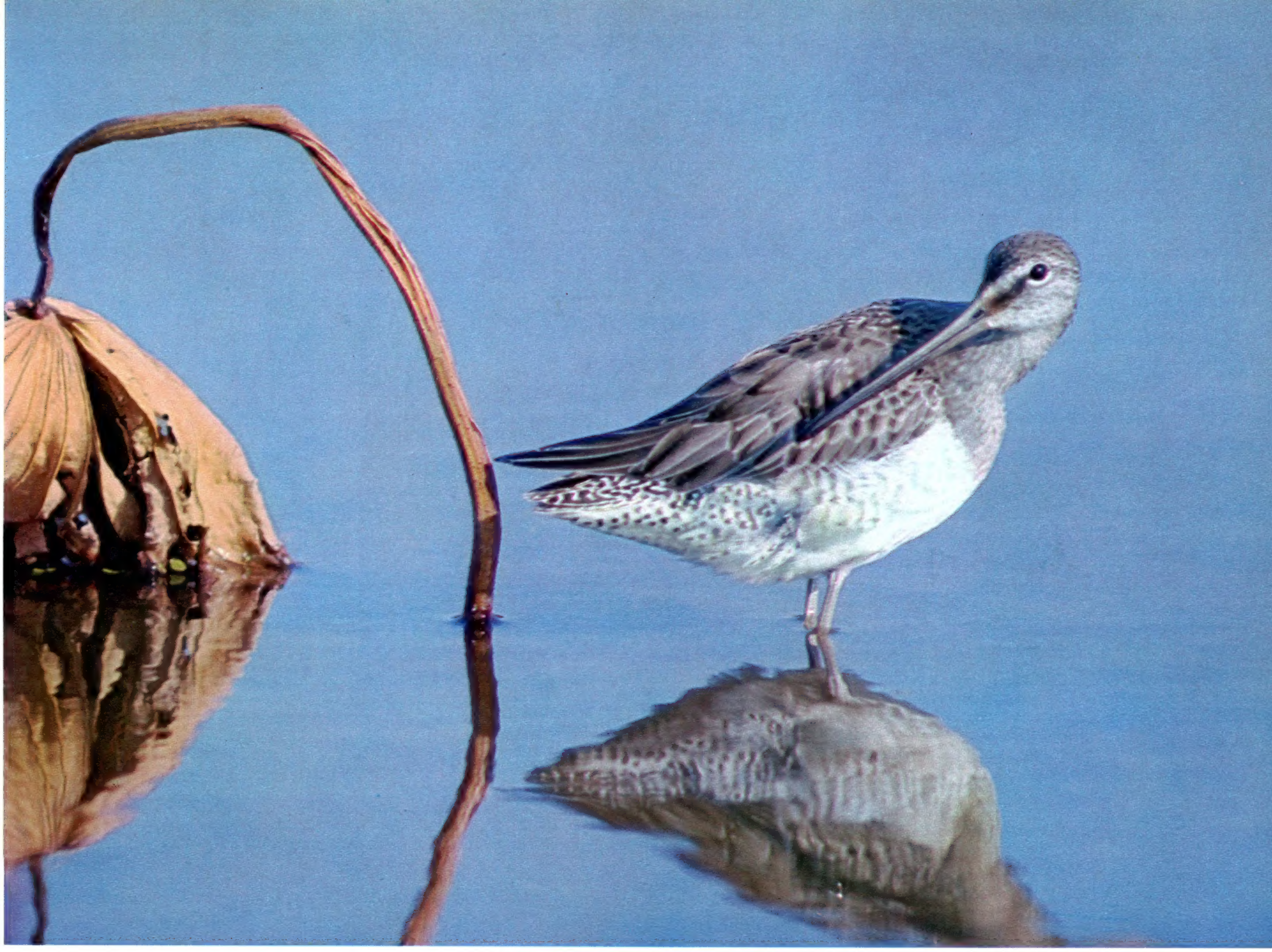
アグーチやパカと同じ齧歯目に属する、世界最大のネズミといわれているカピバラ（*Hydrochoerus hydrochoeris*）にはカグワン河へ調査にいったときに水辺でその足跡を1回見ただけで、ついに出合えずじまいになってしまった。

カピバラはすんでいる場所も食物もパカとだいたい同じである。また両者とも泳ぎの達人であり、とくにカピバラは前肢や後肢の指のあいだにみずかきすら持っている。違いはカピバラが日中、とくに朝夕に行動することと、ふつう5,6頭から20頭ぐらいの群れをつくって生活していることである。カピバラは体長が1メートルから1.5メートル、体重が50キロを越えるやつも決して珍しいことではないという。わたしが調査してまわった地域の人たちはカピバラのことをジューロと呼んでいた。

カピバラに出合えなかったことは、わたしのアマゾン調査行の最大の心残りだが、それでもレギサモの動物商の家にあったやつの頭骨を譲り受けることができたのはわずかの救いであった。その頭骨はクチジロペッカリーと同じくらいに大きかったが、吻の突出がなく全体が四角ばっていて、長くのびた上下2本ずつの切歯は内側に大きな弧を描いていた。また奥の歯はゾウの歯を小さくしたような感じで、洗濯板のような波形の筋が横にたくさん走っていた。■



レギサモの動物商から譲り受けたカピバラの頭骨



オオハシシギ

Limnodromus scolopaceus

シギ科の鳥のうちオオハシシギ属として分類されているものが3種ほどある。これらは次に出てくるタシギ類とよく似た，まっすぐで長いくちばしを持っており，習性などでもタシギと共通する点がある。しかし，そのからだの形や，夏羽（なつばね）が赤褐色になる点などは，オグロシギやオオソリハシシギに近い。一般の習性や繁殖生態などについては，他のシギ類とくらべて，とくに著しい違いは見られない。

オオハシシギは，このオオハシシギ属の1種で，全長約30センチ。冬羽では，からだの上面が灰褐色で下面は淡く，わきに黒い横縞がある。しかし，夏羽は全体に赤褐色に変わる。夏羽，冬羽とも腰の部分が白く，飛んだときによく目だつ。つばさの後縁にも白色部があり，これも飛行時に目につく。あしは黄緑色をしている。

北アメリカ大陸西北部やシベリア東北部で繁殖し，冬は南へ移動する。日本には旅鳥または冬鳥として渡来するが，数は少ない。ただし，近年，観察されることが多くなり，夏期（夏羽）の記録もある。海岸に近い内陸の水田，はす田，湿地，埋立地の水たまりなどにすみ，長いくちばしを土のなかに垂直に入れて小動物をあさる。

シベリアオオハシシギ *L. semipalmatus* はシベリア中部に点々と繁殖地をもつ種で，冬はインド東岸，マレーシア，スマトラなどに渡る。オオハシシギと似ているが，それよりひとまわり大きく，全長約34センチで，腰やつばさ後縁の白色はオオハシシギほど明瞭ではない。従来，日本での記録はなかったが，1972年5月，青森県下北半島の小川原湖で，夏羽の個体が1羽，観察撮影された（右の写真はそのときのもの）。

なお，オオハシシギ属の他の1種は，おもに北アメリカ大陸北東部で繁殖している。

暁のしぎのはねがきももはがき
　　君がこぬよはわれぞかずかく　〈古今集〉
回数の多いことをたとえて《シギの羽掻》という。
シギは羽虫をとるために何度も羽をしごくからだ。
写真はオオハシシギ。シギ科オオハシシギ属。(上)
撮影　高野伸二



1972年5月，本邦初登場のシベリアオオハシシギ。
シギ科オオハシシギ属。
《美しい日本のあなた》を求めて
はるかシベリアの帰途に立ち寄ったこの鳥が
そこで見たのは，いったいなんだったろう？(右)
撮影　高野伸二





タシギ *Gallinago gallinago*

シギ科には，ジシギ（英語ではsnipe，フランス語ではbécassine）と総称されるグループがある。これにはタシギ属およびその近縁の属の鳥が含まれるが，いずれも長くまっすぐなくちばしを持っており，しかも，シギ類としてはあしが短いので，他のシギ類との識別は比較的やさしい。沼地の多い草原にすむものが多く，たいていは単独かつがいで暮らしていて，あまり群れはつくらない。羽毛（うもう）は全体に茶色っぽい隠蔽色になっており，また，夕暮れに活動する習性があるため，観察するのは意外にむずかしい。

タシギはもちろんタシギ属で，全長は約26センチ。そのうちの4分の1が長いくちばしで占められる。体重は個体差が大きいが，ふつうは100～160グラムである。羽色（うしょく）は，こまかい濃淡の斑紋やすじがあって複雑だが，全体としては，背と頭部がクリーム色の帯の何本かはいった濃褐色，腹部が淡黄褐色である。雄と雌に外見上の違いはない。

ユーラシアと北アメリカ大陸の北部で繁殖し，冬は，地中海地方や東アフリカ，東南アジア，日本，スンダ列島などで過ごす。日本には秋の渡りの季節に東シベリアから渡来し，全国の水田，はす田，川のそばの水たまり，湿地などに姿を現わす。最寒期には数が減るが，本州中部以南では越冬するものもある。春になると再び多くなり，その後，5月末までには日本を去って繁殖地に帰る。

この鳥のすみかは雑草やスゲ，イグサなどにおおわれた湿地で，乾燥した場所にいることは決してない。小さな群れをつくっていることも多いが，べつだん群れで生活を送っているというわけではない。繁殖期でもないかぎり，仲間の鳥のことなど気にせず，1羽1羽がまったくの独立生活をひっそりと営んでいるのだ。とくに日中は，人目を避けて，じっと隠れ家に身をひそめていることが多い。このため，たくさんいると思われる場合でも，その姿を目にすることは少ない。

飛び方は速く，飛びたつときに何回かいなずま形を描きながら風上に向かって舞いあがる習性がある。人が近づくと「ジェッ」と，ひと声鳴いて飛びたつが，そのまま遠くまで飛んで逃げるため，「動く標的」を求めるハンターたちの格好の獲物となっている。なお，泳ぎもうまいので，危険が近づくと水のなかに逃げこむこともある。

えさはたいてい夕暮れか夜間に捜す。ミミズが中心だが，ときには昆虫（こんちゅう）類や小さなカタツムリ，軟体動物なども食べる。頭を上下に振るようにしながら，持ちまえの長いくちばしをどろのなかに突っこみ，そのまま吸いこむようにしてとることが多い。くちばしの先のほうが柔らかく，根もとまで突きさしたまま，先を押しひろげて獲物をくわえることができる。水中でくちばしの先を動かし，底にいる獲物を捜すこともある。

“空飛ぶヤギ”のディスプレー

4月上旬の繁殖期になると，雄は求愛のディスプレーを始める。夕暮れ，それも雨の日に行なわれることが多いが，ふだんひっそりと暮らしているこの鳥にしては，かなりはでなものだ。まず，雄は空中高く，ときには100メートルも舞いあがり，大きな輪を描いて滑空する。と思うと，突然尾をひろげ，特徴のある音を発しながら地上めがけて急降下するのである。この音がヤギの鳴き声に似ているところから，フランスではタシギに“空飛ぶヤギ”というあだ名がついているほどだ。しかし，これは鳴き声ではなく，ひろげた尾羽（おばね）のあいだを激しい勢いで空気が通り抜けるときの振動音とつばさの先端が震える音との入りまじったものである。

この鳥のほんとうの意味でのさえずりは，「チェック，チェック」という鋭く短い叫びで，雄が雌を前にしたときに発する。一方，くさむらに身を隠して雄を待つ雌は，甘い「チュック，チュック」という声で雄を呼ぶ。

巣は，ふつう雄が求愛のディスプレーをする場所の付近につくられ，湿地のなかの少し盛りあがった地面にある厚い茂みに隠されている。雌は，巣にすわったまま，まわりの草をくちばしで引き寄せてその上をおおい，トンネルの入り口のようなものをつくりあげる。この入り口を使って，人に見つかることなく巣に出入りするわけだ。ただし，巣そのものは，地上のくぼみにわずかばかりの枯れ草を敷いただけのごく簡単なものである。

1腹の卵数は4個（まれには3個，ごく例外的には5個）。卵の色は土色から緑がかった褐色までさまざまだが，いずれも濃い褐色の斑点が散りばめられている。抱卵（ほうらん）

抱卵する雌のタシギ。シギ科タシギ属。
雄のはでな空中ディスプレーに魅せられた雌は
浮気な雄に棄てられたあと
湿地の茂みにうまく隠された巣で
ひっそりと，しかし，けなげにひなを育てる。（上）
PH. E. HOSKING

春まけて物がなしきにさ夜更けて
羽ぶき鳴く鴫誰が田にかすむ　〈大伴家持〉
タシギは長いくちばしを湿地のどろに突きさし
ミミズなどのえさを捜しだす。
えさ捜しや渡りはふつう夜に行なう。（上）
PH. F. MERLET-ATLAS PHOTO



は雌だけで行ない，20～21日でひながかえる。他のシギ・チドリ類と同じく，ひなは生まれるとすぐ巣を離れる（つまり，巣立ちする）。しばらくは両親のもとで育てられ，その間，８～10日で綿羽が抜け落ち，成鳥羽よりも縞の多い幼鳥羽に変わる。生後２，３週間で飛べるようになるが，完全にひとり立ちするようになるのは生後約40日後，つまり７月はじめごろである。

渡りをはじめるのは他の鳥よりおそいようだが，一定してはおらず，気候の変化に大きく左右される。夜，群れをつくって渡り，日中は途中の沼地にちらばって休んでいる。

オオジシギ *Gallinago hardwickii*

同じタシギ属のオオジシギは，羽色，からだつきともタシギとそっくりなので，野外での識別はむずかしい。外見上の違いは，こちらのほうが少し大きく，全長約30センチであることと，タシギと違って，つばさの裏と後縁に白色部がないことぐらいだろう。

日本には４月ごろ夏鳥として渡来し，本州中部の高原，東北から北海道にかけての草原で繁殖する。冬はオーストラリア，タスマニアに渡るが，これに先立って８月に秋の移動が始まり，平地の水田やはす田などタシギと同じような環境で見られるようになる。

繁殖期の雄は，自分のテリトリー（なわ張り）の上空を輪を描いて「ズビーヤク，ズビーヤク」と鳴きながら飛びまわり，突然，急降下をして，「ガガガガ……」と大きな音を発する。この求愛のディスプレーの音は，タシギの場合と同様，尾羽とつばさの振動音だが，タシギよりもさらに大きく騒々しい。タシギが《空飛ぶヤギ》なら，こちらは《空飛ぶカミナリ》とでもいえそうで，実際，地方によっては，この鳥をカミナリシギと呼んでいるほどだ。木や電柱にとまって鳴くこともある。

地上から飛びたつときは，「ゲッ，ゲッ」としゃがれた声で鳴く。タシギと違ってジグザグには飛ばず，飛び方も重そうに見える。

チュウジシギ *G. megala* は，オオジシギより平均してほんの少し小さいが，ほとんど同大，同色，同形で，野外での判別はまず不可能である。尾羽の数が，オオジシギでは16枚か18枚なのに，こちらは20枚ある点で区別される。シベリア中部に繁殖地をもち，冬は東南アジアに渡る。日本には春と秋に渡来し，低地や海岸の水田，はす田，湿地などに現われる。

コシギ *Lymnocryptes minimus*

タシギの仲間，つまりジシギ類でいちばん小さいのがコシギ属のコシギである。全長約18センチ，体重65グラムほどしかない。からだつきはタシギと似ている。背面は光沢のある黒緑色で，からだじゅうに濃く長い斑点がある。

ヨーロッパおよびアジアの亜寒帯で繁殖し，冬は南に移動するが，日本では秋から冬，ごく少数のものが見られるにすぎない。タシギと同じような環境にすんでいる。

フランスでは，この鳥に〝つんぼのジシギ〟という意味の名がつけられている。これは，この鳥が，人が近づくと，じっと地面にうずくまったまま，まるで人の足音など聞こえないとでもいうように，踏まれそうになるまで飛びたとうとしないからだ。ただし，これは，多かれ少なかれ他のジシギ類にも見られる習性である。



オオジシギ。シギ科タシギ属。
木にとまっているのは繁殖期の雄である証拠。
ふだんは木にとまらないが，今は火急のときだ。
寸暇を惜しんで雌の目を引かねばならぬ。
のんびり地上で休んでなどいられないのだ。（右）
撮影　高野伸二



ヤマシギ　*Scolopax rusticola*

タシギが〝田のシギ〟なら，ヤマシギは〝山のシギ〟。低山帯にある樹木のおい茂った森林をすみかとしている。松林やタケやぶでも見かける。いずれにせよ，やせても枯れても——実際は太っているが，羽色はなるほど枯れ葉色である——シギにはちがいないから，すみ場所の地面はじゅうぶんに湿っていて，くちばしを突きたてて掘りかえせるほど柔らかくなければならない。

シギ科ヤマシギ属の１種で，全長は34～36センチとだいたい一定している。体重は個体差が大きく，200グラム以下のものから400グラム以上のものまである。羽色は全体に茶色っぽく，その濃淡が大理石模様を形づくっている。ただし，これも個体差が激しく，濃褐色から灰色に近いものまでさまざまである。下面のほうが色は薄い。目はかなり大きく，他の鳥よりも後方についている。くちばしは長いが，からだとの比率でいえば，タシギほどではない。先端は丸みを帯びている。あしは，タシギ同様，シギ類としては短い。

この鳥はヨーロッパの大部分，日本，ヒマラヤにいたるアジアの北部で繁殖する。ヨーロッパでは，ピレネー山脈，イタリアやバルカン半島の北部，コルシカ島，カナリー諸島，マデイラ諸島，アゾレス諸島がその南限となっている。日本では北海道，本州，伊豆七島などの林で巣をつくり，冬は暖かい地方の林やタケやぶに移りすむ。奄美大島では，本州などのものと別の亜種が繁殖する。

えさはタシギと同様，ミミズ類が中心で，昆虫類やその幼虫なども食べる。夕暮れとともに活動をはじめ，長いくちばしを湿地の腐植土に突きさして，えさを捜しだす。このため，すみか付近にはその跡がたくさんある。

忍法「枯れ葉隠れ」？

この鳥は身を隠すのがとてもうまい。危険を感じると，くびを引っこめ，くちばしを下に向けて地面に身を伏せ，じっと動かなくなる。すると，褐色の羽毛が周囲に溶けこみ——この鳥のいる地面は，たいてい落ち葉が積もっている——どこにいるのかわからなくなってしまうのだ。おまけに，この鳥は，日中は決して活動しない。このため，観察がとてもむずかしく，研究者はまずこの困難と闘わなければならない。

歩くときは，ゆっくりと小股で進む。背を曲げ，すべるような足どりである。長距離を

まぶたさへ合わで幾夜か暁の
　　鴫の看経して果さまし　〈堀川狂歌集〉
シギ類が田や沼などでたたずんでいることを
《シギの看経》という。
この写真の鳥はオオジシギ。

撮影　柳澤紀夫





移動するときは空を飛ぶが，飛び方は楽々としていて速い。

繁殖期になると，森の上空で求愛のディスプレーが展開される。夕暮れに，雄のヤマシギが上空を飛びまわり，鋭い鳴き声とそれよりずっと低くうなるような声を出すのである。雌は地上にいたまま，甘い口笛のような声で雄を呼ぶ。このディスプレーは3月が最盛期で，5月には見られなくなるが，2度めの繁殖が行なわれる6月に再び展開される。

ヤマシギは一夫多妻制の繁殖様式をとっており，決まったつがいはない。抱卵から育雛（いくすう）まで雌がひとりで行なうのである。雌は小さな茂みの根もとや切り株などに身を隠し，自然にできた地面のくぼみや自分で掘った浅いへこみにかわいた草の茎やこけなどを敷いて巣にする。1腹の卵数は4個。淡黄褐色の大きな卵で，褐色の斑点がある。雌はこれを20～22日間熱心に抱卵し，朝夕えさを捜しにいくときも，30分以上巣を離れることはない。敵が近づいて，やむをえず逃げるような場合にも，決して遠くへはいかず，ほどなく巣へもどってくる。そして，卵がひとつぐらい盗まれていても，そのまま抱卵を続ける。

ひなは，黒い縞と斑点のある茶色っぽい綿毛でおおわれており，孵化したその日のうちに巣立ちする。そして，母鳥に導かれて，森の奥の，もっと湿った場所に移動する。ときには，母鳥がひなをくちばしでくわえて運ぶこともある。こうして移動したあとも，しばらくのあいだひなは母鳥のつばさの下で暖められる。

この間に危険があると，母鳥はひなをあしとからだのあいだでささえたり，背に乗せたり，あしゆびでつかんだり，くちばしでくわえたりして空中に飛びたち，さらに遠くまで運んでいくこともある。ある観察記録によると，4羽のひなを1羽ずつ運ぶために4回も往復したという。ただ，こうした行動が日常的なものかどうかは確かめられていない。

ヤマシギは狩猟鳥としてヨーロッパ全土でハンターたちの垂涎（すいぜん）の的になっている。しかし，そのわりには減っていない。これは，ヤマシギが年2回繁殖すること，この鳥のすみかである森が他のシギ類のすみかである沼や浜べほどには文明の侵食を受けていないことなどによるものと思われる。だが，日本では開発の手が森林にも及び，ヤマシギの繁殖地や越冬地を侵して，ヤマシギの数は急激に減少しつつある。

ヤマシギ。シキ科ヤマシギ属。
繁殖期の雄たちは，雌の気を引くために
森の上空を追いつ追われつ鳴き飛びまわる。
目の位置が他の鳥より頭の後方に寄っている。
PH. L. GAGGERO



思い思いの姿で砂浜に遊ぶオバシギ。
日がな一日えさを捜して過ごすわけではないのだ。
日本では春と秋に海岸の干潟で見られるが
世界的には珍しい鳥のひとつになっている。
シギ科オバシギ属。

撮影　竹丸勝朗



浜べに集うミユビシギとキョウジョシギ。
色の薄いほうがシギ科オバシギ属のミユビシギ。
この鳥にかぎらず，オバシギ類の多くは
すすんで他のシギ類の群れに仲間入りをする。
ほんとはさびしがりやなのかも知れない。

PH. E. HOSKING

コオバシギ　*Calidris canutus*

シギ科には，フランス語でbécasseauと総称されるグループがある。オバシギ属とその近縁の属の鳥たちで，ここではオバシギ類と呼ぶことにする。かれらは，シギ類としては小型で，比較的短いあしをもっている。沼沢や干潟，海岸などにすみ，群れをつくって忙しそうにえさをあさったり，突然飛びたったかと思うとハトのようにいっせいに旋回したりする。日本には約15種が渡来し，その姿も動作もたがいにかなり似ているが，大きさ，背の色，くちばしの形，あしの色などによって見分けがつく。

コオバシギはオバシギ属の1種。全長約25センチ，体重約100グラムで，オバシギ類のうちでは大きいほうに属している。比較的短いくちばしをもち，ずんぐりしたからだつきをしている。夏羽では，からだの下面が赤錆色，上面は黒とくり色が織りまぜられている。また，冬羽では，上面が灰褐色，下面が白っぽくなる。

スピッツベルゲン諸島，アジアやアメリカ大陸の極北地，グリーンランドでだけ繁殖し，冬には南へ渡っていく。ヨーロッパでは，7月の終りに最初の渡りの群れが到着し，それから11月まで次々と通過していき，最終的には北海，ドーバー海峡，大西洋の沿岸地方に身を落ちつける。北海沿岸では無数の大きな群れをなしているが，それより南の大西洋沿岸――ヨーロッパからアフリカの喜望峰にいたる沿岸であれ，パタゴニアにまで続くアメリカ大陸沿岸であれ――では小さな群れで進んでいく。太平洋沿いにも，オーストラリアやニュージーランドまでも渡る。日本には旅鳥として4～5月と9～10月に渡来し，海岸や河口の干潟に姿を現わすが，数は少なく，1，2羽がトウネンやオバシギの群れに混じっているにすぎない。内陸部の水辺には見られない。

コオバシギは，ずんぐりして鈍重な姿をしているにもかかわらず，なかなか活発な動作をする。走ったり，飛んだりするのがうまいだけでなく，泳ぎも非常にうまい。声は鋭く，よく通る口笛のような音だが，渡りのときには小さな声を出すだけである。よく群れをつくるが，多くのシギ類とは違って，他の種との混群はあまりつくらない。

えさは，小さな動物，とくにゴカイ，カニ，あまりかたい殻におおわれていない軟体動物，昆虫類とその幼虫などである。小さな群れをつくって海岸を歩きながら，どろのなかや砂の上にいるこれらの獲物をつかまえる。各個体が自分かってにえさをあさり，仲間と距離をおいていることもあるが，ちょっとでも警戒の念が起こると，大きな群れとなって集まり，いっせいに空に舞いあがったり，まるで生きたじゅうたんのように地上をおおいつくしたりする。

巣はふつう，地衣類や短い草でおおわれた



少し隆起した場所につくられる。5月の末，雌はここに，中くらいの大きさの洋梨(ようなし)型の卵を4個産む。卵の色は地面の色に似てさまざまだが，いずれも薄い斑点がある。雌はこれをいっしょうけんめいに抱いて暖める。ひなの成長は早く，7月末にはもう飛べるようになる。

同じオバシギ属の**オバシギ***C. tenuirostris*は，コオバシギよりひとまわり大きく，夏羽でも赤錆色にはならず，肩のあたりにくり色のまだらが少し出るだけである。シベリア東北部の極圏で繁殖するといわれるが，詳しいことはわかっていない。冬はフィリピン，東南アジア，オーストラリアなどに渡り，日本には旅鳥として，4～5月と8～10月に姿を現わす。海岸の干潟で数十羽の群れをつくり，波打ちぎわで小さなアサリやハマグリなどをあさっているのを見かけることが多い。内陸部の水辺にははいらない。あまり人を恐れないので，わりあいに近づきやすい。

砂浜はミユビシギご愛用の高級レストラン。
波のボーイが寄せては返すと，そのたびに
砂の食卓には新しいごちそうが用意されている。
でも，次から次へと運んでは下げるから
その忙しいことおびただしい。（右）
PH. J. BURTON-BRUCE COLEMAN LTD

ミユビシギ *Calidris alba*

ミユビシギはオバシギ属の1種だが，その名のとおり，あしゆびの数は3本だけで後趾（こうし）がない。このため，他種と簡単に見分けがつき，学者によっては，この種だけで独立の属をつくっているほどである。全長約20センチ，体重約60グラムと，ヒバリよりやや大きい程度で，くちばしとあしは黒い。羽色は，夏羽では背が褐色と灰色と白の斑点のある黒で，顔と胸が赤褐色を帯びているが，冬羽では，全体に灰色っぽくなる。腹部は，夏羽，冬羽ともに白い。

この鳥はスピッツベルゲン諸島，シベリアやアメリカの極北部で繁殖し，北海から喜望峰，パタゴニア，オーストラリアまで，世界のほとんど全域で越冬する。日本では，最初の渡りが7月末に始まり，9～10月にその数が多くなって，一部はそのまま越冬する。波の打ちよせる砂浜に群れをつくっているのがふつうだが，ときには海岸に近い沼の岸や泥質(でいしつ)の河口でも見られる。

ずんぐりしてほとんどくびがないように見えるこの鳥は，あしも比較的短いくせに，いつも忙しそうに小走りに走りまわっている。おそらく，オバシギ類ではいちばん速いだろう。海岸にいくと，かれらが1列になってえさをついばみ，波打ちぎわの波の動きに合わせていったりきたりする姿がよく見られる。えさはふつう動物質のものだが，植物の小片などを食べることもある。

海岸で大きな群れをつくっているときは，とても警戒心が強く，ちょっとしたことでいっせいに飛びたつ。そのくせ，地上で小さな群れをなしているときはあまり人を恐れず，簡単に近づくことができる。







サルハマシギ

Calidris ferruginea

これもオバシギ属の1種で、全長は20センチ以下、体重約50グラムである。夏羽では、からだ全体が暗紅褐色をしているのですぐ見分けられるが、冬羽では背面が灰褐色、腹部が白で、あとで出てくるハマシギやトウネンと似ているため、よく混同される。しかし、くちばしが頭よりも長くて細く、ダイシャクシギなどのように弓形に曲がっており、また、あしが比較的長く、歩き方が優雅なので区別できる。

シベリアのツンドラで繁殖し、アフリカの内陸部や東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドで越冬する。日本では渡りの途中、旅鳥として5月と8，9月に姿を現わすが、あまり多くはない。

海岸地帯であろうと内陸部の湖や池のまわりであろうと、どろの多い平坦な岸べを好み、スゲのおい茂ったような沼地は避ける。

サルハマシギ　シギ科オバシギ属
海岸でも湖や池の周辺でも見かけられるが
どろの多い平坦な岸べを好み
スゲなどのはえた沼地は苦手らしい。
（上は夏羽と冬羽の変りめ）（下は冬羽）
撮影　松本勝彦（上）　A. J. DEANE BRUCE COLEMAN LTD（下）



すらりと伸びたタシギのくちばしは全長の4分の1以上もある。沼地のどろに突きさしたまま先端だけを開いてミミズなどをとらえられ，ストローのように吸いこむこともできる。 *PH. A. MOLINIER-JACANA*



シギ科オバシギ属のニシトウネン *Calidris minuta*は，全長約14センチ，体重30グラムあまりの小さな鳥。シベリアで繁殖し，冬になると喜望峰やセイロン島などにまで渡っていくが，日本での記録はない。飛びたつ時はひらひらとチョウのように舞いあがるが，飛び方そのものは速い。多くのオバシギ類と同じく，群れをつくる性質が強く，人を恐れない。

PH. A. MOLINIER-JACANA



ヤマシギは森の忍者。落ち葉のつもった湿地をすみかにしており，危険を感じると地面にじっとうずくまる。すると褐色のからだが周囲の色にまぎれ，姿が見えなくなってしまうのだ。写真だと鳥だけにピントが合うので見分けがつくが，実際には，まず気づかない。実験1：この写真を遠くからながめてみよう。実験2：この写真をさかさにして見てみよう。

PH. E. HOSKING





ハマシギ　*Calidris alpina*

ハマシギもオバシギ属に分類される鳥で、日本に渡来するシギ類のうちもっとも小じょうなもののひとつとなっている。全長は約21センチ。くちばしは黒く、頭部よりもわずかに長くて、かすかに弓形に曲がっている。あしの色も黒い。夏羽（なつばね）は背面が赤褐色で、腹部には大きな黒い斑紋がある。この斑紋は、まるですみでも塗りたくったような感じで、どうひいきめに見ても、とても美しいとはいいがたい。冬羽は、全体に灰色っぽく、じみになってしまう。

ユーラシアとアメリカ大陸の北部で繁殖し、イギリスや地中海地方、北アフリカ、アジア南部、北アメリカ中部以南で越冬する。日本には、北千島やシベリア北部で繁殖したものが渡来し、秋から春にかけて、全国各地の海岸や河口、大きな川の下流の岸などにすみつく。春の渡りの時期には、夏羽のものも見かけられる。

単独か小さな群れでいるときは、あまり人を恐れないし、他のシギ・チドリ類とすすんで群れをつくる。この群れにムクドリが仲間入りし、浜や泥州の水ぎわでいっしょにえさをあさっていることも多い。

ところが、ハマシギは大きな群れをつくっているときはとても神経質で、群れのなかのいちばん臆病な鳥が一声急を告げただけで、群れ全体がいっせいに飛びたってしまう。そして、「ヒリーッ、ヒリーッ」と鳴き騒ぎながら、まるで何かにあやつられてでもいるかのように一団となって空を舞うのである。この群舞は、ちょうど秋の夕暮れに見られるムクドリのそれを思わせるもので、とくに、つばさの裏が陽光に白く輝くようすはちょっとした壮観ではある。ただ、どうしてこのように同時に一致した行動がとれるのかは、まだ明らかにされていない。なお、地上ではあまり鳴かない。

他のオバシギ類と同様に、河口や平坦でどろの多い海岸、海に近い広々とした湿原などに多く、小さなエビ、カニ、ゴカイ、水生昆虫（すいせいこんちゅう）などを食べているが、波に洗われる岩場、内陸部の見通しのよい湖や川の岸べでも見かけられる。

鴫の羽どれ程かいてたんのする　〈一茶〉
またまた出てきた《シギの羽掻》。
なにしろ、回数の多いことのたとえなのだから。
写真はシギ科オバシギ属のハマシギ。
1羽や小さな群れだと人をあまり恐れない。（左）
撮影　[illegible]

心なき身にもあはれは知られけり
　しぎたつ沢の秋の夕ぐれ　〈西行法師〉
「ピリーッ、ピリーッ」
暮色濃い秋空にハマシギが群れ鳴き騒ぐ。
長崎県諫早海岸にて（上）
撮影　[illegible]



繁殖期のハマシギは腹黒い！
たがいに相変わらず仲よく暮らしているようでも
心のなかでは恋敵への闘志と嫉妬が渦まいている
……というわけではない。
夏羽の腹部には大きな黒い斑紋があるのだ。（下）
PIL E. HOSKING







その他のオバシギ類

トウネン *C. ruficollis* 全長約15センチで，日本に渡来するシギ類のうち，もっとも小さいもののひとつ。夏羽では，頭と顔，胸が赤褐色で，背は黒と赤褐色のまだらである。冬羽では，からだの上面が灰褐色で，下面は白い。くちばしは短くて黒く，あしも黒い。レナ河以東の北部シベリアで繁殖し，冬は東南アジアやオーストラリアで過ごす。日本には春と秋に旅鳥として渡来し，全国の海岸や干潟，大きな川の岸べなどで群れをつくって，

冬羽のトウネン。シギ科オバシギ属。
全長約15センチとあまりにも小柄なため
"当年"に生まれたばかりのようだとして
この名がついたという。
夏は赤茶色っぽい羽毛にころもかえする。（上左）
撮影　高野伸二



小動物を食べて生活している。他のオバシギ類と混群をつくることもある。鳴き声は細く，「チュリッ，チュリッ」と聞こえる。

オジロトウネン *C. temminckii* シギ類のうちでいちばん小さく，全長約14センチ，体重約30グラム。羽色（うしょく）はトウネンの冬羽とよく似ているが，あしは緑っぽく，黄色や褐色を帯びていることもある。じみな存在なので，たいていは見過ごされてしまう。海岸よりも内陸の沼や川の岸べを好み，とくに，草のおい茂った池や湖のどろの多い斜面でよく見かけられる。他のオバシギ類にくらべて群れをつくる性質には乏しく，単独か小さな群れになる程度で，他のシギ類との混群はつくらない。ヨーロッパとアジアの北部で繁殖し，日本には春と秋に旅鳥として渡来する。少数は日本でも越冬する。

ヒバリシギ *C. minutilla* 全長約15センチ。トウネンの冬羽に似ているが，それよりも褐色に富み，背にＶ字形の白線がある。あしは黄緑色。東北シベリアや千島北部で繁殖し，冬は南に移動する。日本には，春と秋に旅鳥として渡来し，内陸の湿地や草のはえた干潟などに生活するが，あまり多くはない。

ウズラシギ *C. acuminata* 形や色はヒバリシギに似ているが，それよりひとまわり大きく，全長約21センチ。夏羽，冬羽ともに他のシギよりも褐色に富み，とくに頭上は赤褐色でよく目だつ。シベリアの北部で繁殖し，春秋の渡りのときに日本にも姿を現わす。海岸や干潟でえさをとることもあるが，水田，はす田，内陸の湿地などで見ることが多い。大きな群れはつくらない。

谷かくれ木かくれ鴫の帰るなり　〈富取芳河士〉
日本のシギ類のほとんどは冬鳥か旅鳥で
春になるとシベリアなどに帰っていく。
写真のヒバリシギもそのごたぶんにもれない
シギ科オバシギ属。（左下）
撮影　高野伸二

ウズラシギ。シギ科オバシギ属。
シギ・チドリ類は１か所に何種もすむことが多い。
この写真の撮影地・仙台市蒲生にも，このほか
ミヤコドリ，ダイゼン，ツルシギ，タカブシギ
ミユビシギ，オバシギなど数多く渡来する。（上）
撮影　竹丸勝朗









キリアイ　*Limicola falcinellus*

キリアイは全長約17センチ、体重32〜34グラム，スズメよりやや大きいぐらいの小型のシギである。オバシギ類のひとつといえるが，今までに出てきたものと違って，キリアイ属に属している。

背は全体に黒いが，褐色の線でうろこ状の模様が描かれており，さらに白い帯が2本はいっている。眉線と頭側線は白く，頭上が黒っぽいのでよく目だつ。くちばしは灰色で，先にいくほど黒くなり，先端は少し下に曲がっている。

スカンジナビア半島北部とシベリアのツンドラ地帯で繁殖し，冬が近づくと南へ渡って地中海沿岸や北アフリカ，東南アジアなどで越冬する。日本には春秋の渡りのときに渡来するが，春には少なく，ほとんど記録がない。

鷸突の行く影長き日あしかな　〈児竹〉
シギ類はむかしから猟鳥としてもてはやされ
これを追う銃声が秋空にとどろいたものだが
今ではほとんどが狩猟禁止となっている。
写真はシギ科キリアイ属のキリアイ。（左上）
撮影　高野伸二

キリアイの属名 *Limicola* は"沼地にすむ"の意だが，実際，沼地のなかや湖，干潟の浅瀬にはえたスゲの茂み，どろの多い池の周辺などで見かけることが多い。

性質は穏やかで，警戒心が少なく，どちらかというと孤独を愛する。たとえば，他のオバシギ類が敏捷に動きまわるのに対し，キリアイの歩き方は比較的ゆっくりしており，小刻みに歩いたかと思うと立ちどまり，羽毛(うもう）をさか立て，背に頭をうめて眠っているようなそぶりを示す。　2、3羽のときはトウネンの群れにまじっていることも多いが，他の鳥にはほとんど関心を示さない。人がそばに近づいても恐れず，いよいよというところでやっと飛びたっても，やがて，またもとの場所に舞いもどってくる。危険があるとくさむらに逃げこみ，その場にうずくまったまま，じっと危険が過ぎ去るのを待っている。

キリアイは海岸の干潟や沼地，河口の浅瀬で
「ジュリー，ジュリー」ときどき鳴きながら
トビムシやゴカイなどをあさる。
他のオバシギ類よりゆっくりした足どりだが
それでもけっこう忙しそうだ。（左下）
撮影　水野仲彦

ヘラシギ

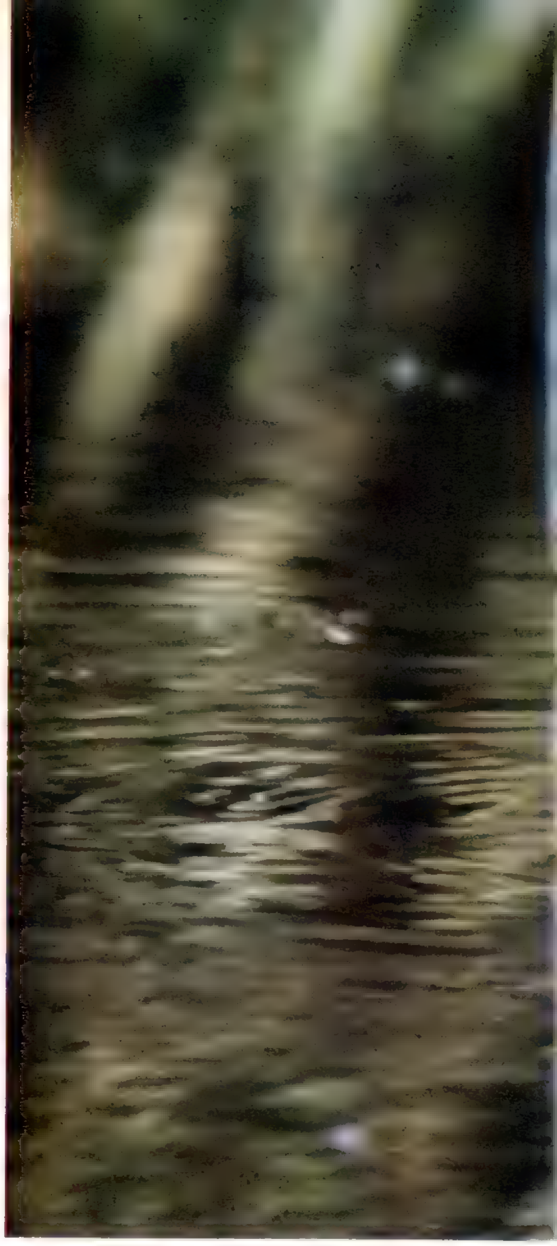
Eurynorhynchus pygmeus

ヘラシギ属。くちばしの先がへらのように平たくなった変わった鳥で，ヘラシギの名は，もちろんここに由来している。全長約15センチ。冬羽では，上面が灰褐色と黒のまだらで下面が白く，夏羽では，頭，胸，上面が赤褐色になる。つまり，夏羽，冬羽ともトウネンに似ているが，くちばしに注目すれば，まちがうことはない。

シベリアのごく一部で繁殖する珍しい種類で，日本には春と秋に旅鳥として渡来するが，春は少なく，わずかな観察例があるにすぎない。海岸や河口の干潟，干拓地の水たまりの際などでトウネンやハマシギの群れといっしょにいることが多い。

ヘラシギ。シギ科ヘラシギ属。
へら状のくちばしがこの鳥のトレードマーク。
これで水辺に集まる小さな生きものを捕えるのだ
「チュリリ，チュリリ」とやさしく鳴くことはあるが
へらへら笑ったりはしない。（上）
撮影　高野伸二







エリマキシギ

Philomachus pugnax

エリマキシギは形態的にも生態的にも非常に変わった鳥で，それだけでシギ科のひとつの属(エリマキシギ属)を構成している。全長は雄が約30センチ，雌が約24センチと雌雄で異なるが，羽色は，冬羽では雌雄とも背が褐色，腹部が白，くちばしが黒，あしが緑っぽい色で，クサシギ類に近く，歩き方もそれとよく似ている。また，くちばしがまっすぐで，比較的短い点からすると，オバシギ類に近いともいえる。だが，繁殖期の雄では，くびのまわりに巨大なえりまき状の羽毛が現われ，頭部の後ろにさか立ったふさ状の耳羽をもつようになるので，他のシギ類と見まがうことはない。

これらの飾り羽の色は個体ごとに非常な変化があり，２羽の雄を見ても同種の鳥とは思えないほどである。色は黒，白，褐色，黄などさまざまで，しかもそれらが無地や縞，斑など複雑に組み合わせられている。また，頭部や背の羽毛も，濃紺や黒の斑点のある褐色のもの，白，黒，褐色のものなど複雑である。

雄のエリマキシギはあまのじゃく。
冬は白っぽい単純な装いをしているくせに
夏が近づき，暖かくなってくると
えり巻きや耳袋をつけるようになるのだ。
シギ科エリマキシギ属。（上左）

PH. MARKHAM



エリマキシギはユーラシア大陸北部と中央ヨーロッパの一部で繁殖する。冬は南へ渡り、日本では春と秋の渡りのときに見られる。春の渡りに際しては、えり巻き状の飾り羽をもったものも少数観察されている。どちらかといえば内陸性で、海岸はあまり好まない。沼地や池の岸、湿原をすみかとし、夏はとくにツンドラに多い。

雄と雌は交尾のとき以外は別々に行動することが多く、渡りもたいてい別に行なわれる。渡りのときは、夜間に飛び、日中はクサシギ類と同じように休んでいる。えさは朝と夕方に捜しに出かけ、水辺や草地でいろんな水生の小動物をあさる。また、植物の種子なども食べ、とくに冬はそれが多い。インドで越冬するものは、ほとんど米だけをえさにしているほどだ。

草原の無言劇

繁殖期になり、飾り羽がはえそろうと、雄はアリナと呼ばれる、集団ディスプレー場に集まってくる。これは毎年同じ場所が使われるが、ふだんすんでいるところと大差があるわけではない。たいてい少し小高く、短い草が一面にはえている。雄たちは、ここへやってくると、まず、それぞれ自分のテリトリー（なわ張り）を定める。これは直径60センチほどの小さなもので、草が踏みつけられているので、すぐそれとわかる。

朝と夕方、数時間３～８羽の雄がこのアリナに集まってきてはディスプレーを行なう。それぞれの雄が自分のテリトリーで相手を待ち受け、あるいは他の雄のテリトリーに押しかけ、適当な相手を見つけては、たがいににらみ合ってディスプレーを競うことも多い。

このディスプレーは、くびを前にのばし、えりの飾り羽をいっぱいにひろげるところから始まる。それからは、まるで狂ったかのように、走ったり、止まったり、気どって歩いてみたり、空中に跳びあがったり、全身をうち震わせたり、それはもうたいへんな健闘ぶりである。しかもこれが終始無言のまま行なわれるから、その光景は一種異様な感じがするほどだ。

たいていの場合はこれだけで終わるが、相手が手ごわいと格闘になることもある。２羽のライバルはたがいにとびかかり、くちばしでつつき合い、つばさでたたきあう。しばらくすると両者は離れ、少し休んでから、またもやすさまじい勢いで戦いを繰りひろげる。こうして戦闘は両者が疲れはててしまうまで続けられるが、長い休息をとってから、２度、３度と繰り返されることもある。ただ、この鳥の武器となるくちばしは先端が丸くなっているので、戦っても血を見るようなことはない。たいていの場合、両者とも羽毛の１枚すら失うことはない。

この無言のディスプレーは、他の鳥類の《さえずり》に相当する役割を果たすものだと考えられる。つまり、その目的は雌を引きつけ誘惑することにあるのだ。しかし、雌は必ずしもその場に居合わせるとはかぎらない。そこで、雄はアリナを離れ、沼地に出かけて雌にいい寄ることも多い。

なお、この鳥の属名、種名ともに、「戦い合う」、「好戦的な」の意味である。

フリーセックスにも秩序はある？

ところで、すでに何回かでてきたように、雌雄にきわだった差異のある鳥では、一夫多妻の繁殖様式をとるものが多い。エリマキシギの場合も、つがいとなって生活することはなく、雄は巣やひなにまったく関心を示さない。しかし、１羽の雌が数羽の雄と次々に交尾している光景も見られるから、一妻多夫と

草原の踊り場に繰りひろげられる華麗な無言劇
繁殖期になると、エリマキシギの雄たちは
えり巻き羽をいっぱいに開いて美を競いあう。
白熱のあまり、けんかになることもしばしばだ。
女は男を狂わせるのだろうか？（左下）
PH. BEL VIENNE-JACANA

泥亀の鴫に這いよる夕かな　〈其角〉
エリマキシギのすみかは内陸の沼地や湿原
えさはいろんな水生動物や植物の種子で
たいていは朝と夕方に捜しにでかける。
日本では旅鳥としてまれに見られるだけ。（上）
PH. L. R. DAWSON-BRUCE COLEMAN LTD.



もいえる。つまり，エリマキシギは，雌雄に秩序だった関係がなく，いわばフリーセックスを営んでいるということができるのだ。ただ，雄どうしでの力関係はちゃんと定まっているらしく，上位の雄ほど雌と交尾する回数は多い。だが，この力関係を決定する要因がなんなのかはよくわかっていない。さきの華麗なディスプレーや必死の格闘にしても，雌が相手の雄を選ぶにあたって，実際上どれほどの意味をもつのかは不明である。

雌は交尾後，アリナから少し離れた沼地に分散して巣をつくる。巣は，たいてい水辺に近いスゲの茂みにあり，浅いくぼみに少しばかり枯れ草が敷いてある。1腹の卵数は4個で，卵はオリーブ色の地に黒っぽい斑点のついた洋梨型をしている。抱卵（ほうらん）期間は約21日で，ひなは孵化後19日ほどで飛べるようになるが，9月ごろまでは母親といっしょに暮らす。

ところで，最近，デンマークのふたりの学者の研究によって，エリマキシギに関していくつかの興味深い事実が明らかになった。その一部を紹介しておこう。

それぞれの雄は，ある決まった時間だけアリナでディスプレーを行ない，昼ごろ，よく単独か小さな群れ（雌が加わることもある）でえさを食べにいく。この場合には，いっさいの性的活動が中断され，ついさっきまで戦いを交えていたはずの2羽の雄が仲よく肩を並べていることも珍しくない。これは，エネルギーの消耗を最少限に減らしてくれるという意味で好つごうなのである。

また，同一地域にすむ（つまり，ひとつのアリナを共有する）エリマキシギは4つのグループに分けることができることも明らかにされた。第1のグループは，きわめて多彩な羽毛をもった雄からなり，ふだんアリナを占有していて，他の鳥の侵入を防いでいる。第2のグループは，アリナに入ることは許されず，見物人として付近をうろついている。第3のグループは，飾り羽の白い雄で，2，3羽の雌とともにアリナをよく訪れ，そこに入れてもらえるが，アリナを他の鳥から守ることはない。第4のグループは雌で，アリナですさまじい戦いが繰りひろげられているときにそこへやってきて，何羽かの雄を観察し，そのうちの1羽，あるいは数羽と交尾することになるのである。

非繁殖期のエリマキシギの雄と雌は
からだの大きさ以外に外見上の違いはないのに
決して行動をともにしようとはしない。
群れも別なら，渡りも別々というありさまだ。
これは封建社会の遺制か，未来の先取りか？
PH. L.-R. DAWSON/BRUCE COLEMAN LTD.

日本のシギ・チドリ類 2

日本での生活と生態断片

高野伸二

前号では日本で見られるシギ・チドリ類の識別法を述べた。今回はそれをふまえてかれらの日本での生活をみよう。

日本で繁殖する種類

日本に渡来したことのあるシギ・チドリ類94種のうち繁殖の記録のあるものはヤマシギ、オオジシギ、イソシギ、アカアシシギ（以上シギ科）、イカルチドリ、コチドリ、シロチドリ、ケリ（以上チドリ科）、タマシギ（タマシギ科）の９種だけである。

伊豆七島や本州中部以北（とくに北海道東部）の林で繁殖するヤマシギは、日中は林のなかに潜んでいるので姿を見ることが少ないが、繁殖期の夕方には雄が林の上をゆっくり飛びまわって鳴くのでよく目だつ。また、本州中部の高原や本州北部から北海道の草原で繁殖するオオジシギも大きな音をたててディスプレー飛行をするので、繁殖地ではよく知られている。この鳥は繁殖地としては日本だけが知られ、冬にはオーストラリア、タスマニア、ニュージーランドに姿を現わすが、最近オーストラリアで越冬する数が減ったので、日本の繁殖地を調査したいというオーストラリアの鳥学者が来日したことがある。本州中部以北の川原で繁殖するイソシギも「ツチチツチチツチチ」と鳴いてディスプレー飛行をする。

コチドリ、イカルチドリ、シロチドリは全国的に繁殖するが、シロチドリは海岸の砂浜から川の下流域が、コチドリは下流から中流が、イカルチドリは中流から上が、おもな繁殖地である。しかし、３種ともに繁殖している場所もある。

本州中部以南の水田、はす田、湿地などで繁殖するタマシギは、雌雄の役割がふつうの鳥と逆になっている特異な繁殖習性で知られている。詳しくは本誌101号のカラーページを参照してほしい。

日本で越冬する種類

日本で繁殖するもののうちタマシギ、ヤマシギ、イソシギ、シロチドリ、イカルチドリ、ケリは本州中部以南では冬期もふつうに見られ、コチドリは九州で越冬している。また、北の地方から渡来するもののうちハマシギは各地の海岸に大群で見られ、オジロトウネン、クサシギ、タシギは川の流域、池沼畔、水田などに、アオシギは山地の渓流畔に、ミユビシギは砂浜に、ダイシャクシギやダイゼンは干潟に、それぞれ冬の間見られる。ダイシャクシギの場合、広い干潟のあったころは各地で越冬したものと思われるが、現在は広大な干潟のある愛知県鍋田や九州の有明海岸などで知られるだけとなった。また、タゲリは広い水田跡に群れで渡来し、渡りの型からいえばまったくの冬鳥型を示す。

以上の16種が日本でふつうに越冬する種類であるが、このほかに越冬の記録のあるものとしてエリマキシギ、オオハシシギ、トウネン、ウズラシギ、ハジロコチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、セイタカシギ、ミヤコドリが知られている。

春秋のシギ・チドリ類の生活

渡りの時期のシギ・チドリ類は、おもに海岸や河口の干潟に生活するものと、内陸の水田、はす田、湿地などで暮らすものとに分けられる。前者にはダイシャクシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ、オオソリハシシギ、アオアシシギ、キアシシギ、ツルシギ、ソリハシシギ、オバシギ、ハマシギ、キョウジョシギ、ダイゼン、メダイチドリなどがあり、後者にはクサシギ、タカブシギ、コアオアシシギ、コシャクシギ、ヒバリシギ、オジロトウネン、ウズラシギ、エリマキシギ、タシギ、ムナグロ、セイタカシギなどがある。もっとも、干潟でえさをあさっているものも、潮が満ちて干潟がなくなれば近くの水田やはす田、湿地、干拓地の水たまりなどに移動して引続きえさをとったり、水浴びしたり、休んだり、眠ったりすることが多い。ただ、ダイシャクシギやホウロクシギは満潮のときにもあまり内陸にははいらず、海岸の干拓地や堤防にいることが多い。淡水の水辺にいる種は、海岸から遠く離れた川の上流の中州や水たまりにもよく見られる。

いずれにしろ、かれらのえさはカニ、貝、ゴカイ、昆虫（こんちゅう）といった動物質が中心で、生活もたがいに似たものが多い。このため、満潮の際に水面から出ている場所や安全な水たまりでは、よく、たくさんの種類が集まって混群をつくっているのが見かけられる。

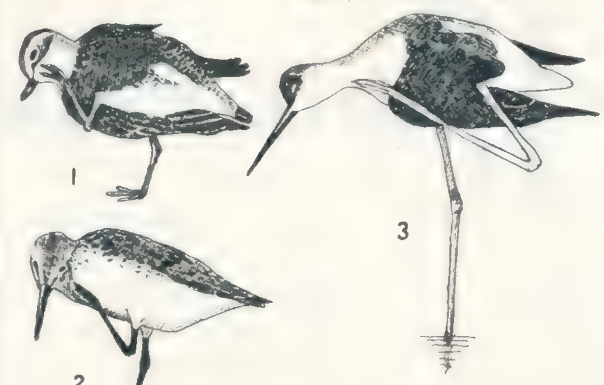
このように、日本では四季を通じて、さまざまのシギ・チドリ類が生活している。次に、その生活で見られるいくつかの興味深い習性をとりあげてみよう。

頭かきの方法

一般に鳥が頭をかく方法には２種類ある。ひとつは片あしをあげてそのまま頭をかく方法で、〝直接頭かき〟と呼ばれ、もうひとつは片方のつばさを下げ、同じ側のあしをつばさとからだのあいだから出して頭をかく方法で、〝つばさごし頭かき〟といわれる。同じチドリ亜目でも、シギ科はすべて直接頭かき、チドリ科はすべてつばさ越し頭かきをすることが知られている。また、ヒレアシシギ科、タマシギ科、ツバメチドリ科は直接頭かき、セイタカシギ科、ミヤコドリ科はつばさ越し頭かきである。頭をかくという比較的簡単な動作にふたつの方法があり、しかもそれが近縁のグループでも違っているということはおもしろい。

なお、レンカク科についてはわたしはどちらか知らないので、日本に渡来の記録のない他の科の鳥とともに、ぜひ知りたいと思っている。

図１　頭かき３例



1　メダイチドリのつばさごし頭かき
2　ハマシギの直接頭かき
3　セイタカシギのつばさごし頭かき

図２　キアシシギの寄食



ホウロクシギの落とすカニのあしをねらう３羽のキアシシギ

図３　横にくわえた二枚貝をけり落とすオオソリハシシギ

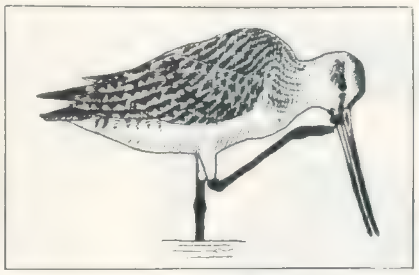


図４　ゴカイをそろそろと引きだすメダイチドリ



キアシシギの寄食

シギ類のうちでいちばん大きなホウロクシギはカニ取りの名手である。浅い水のなかを歩きながら下に曲がった長いくちばしを水中に入れたと思うと、たちまちカニをつかみ出し、ブルブルとふるってあしをもぎ取り、胴だけを食べる。

ところで、こうして次々とカニを平らげていくホウロクシギのまわりを数羽のキアシシギがうろうろしているのを見かけることがある。これはホウロクシギの落としたカニのあしを拾って食べるのが目的で、一種の寄食ということができる。ただ、どのキアシシギもがするわけではないし、他の中型のシギ類では見たことがない。しかし、干拓地などではサンドパイプから流れでる水に混ざっているえさをとるために、キアシシギ、オバシギなど多くのシギ・チドリ類が集まっていた例がある。これは、どれか１羽がそこでえさをあさりはじめたのを他の鳥がまねたものと思われるので、この点から類推すれば、１羽のキアシシギがホウロクシギの落とすあしを拾って食べだせば、他の個体や他のシギが同様のことを始める可能性はある。

オオソリハシシギと二枚貝

オオソリハシシギは、10センチぐらいもあるくちばしをどろのなかに根元までさし込み、小動物をじょうずにくわえ出して食べる。上総一の宮での観察では、この鳥は長さ２センチほどの細長い二枚貝を食べるときには、まずくちばしの先にはさみ、くわえなおしながらしだいにくちばしの根元に移して飲みこむ。ところが、貝が根元まできたときに横になると、くちばしの両側に貝がらの端がはみ出て飲みこめなくなることがある。すると、おもしろいことに、あわてて片あしをあげ、あしゆびで貝をけり落とすのであった。あの長いくちばしは大きく開か

——→ ＊

生きものの世界への疑問 8

淘汰と適応

日高敏隆

突然変異と並んで、自然淘汰ということばも、少し安易に使われすぎているように思う。淘汰というと、すぐそのものが抹殺されてしまうような印象を受けるが、本来、自然淘汰というのは子孫の残し方が多いか少ないかということをいっているのである。つまり、より適応したものはより多く子孫を残し、より適応していないものは、よりわずかしか子孫を残さない、ということをいっているのであって、適応したものだけが子孫を残すなどといっているのではない。

すると、ひとつの種から新しい種ができるときには、今までより適応したものがしだいにふえていき、やがてそれがひとつの新しい種となって分離することになる。したがって、それは化石の記録の上にも反映されてくるはずであって、あるひとつの種に属する生物の化石のバラエティーがしだいに大きくなり、そのうちあるものだけがふえていって、あるときそこから多少飛躍した新しい種が出現する、ということになるはずなのだ。しかし、実際の化石の記録は、どうもそうでないらしい。



もちろん、化石の数は少ない。ある生物が化石となって残るのは、まったく偶然のことである。だから、化石では、そのような変遷のあとなどとうていわからないだろうとも考えられる。だが、化石になるのがまったく偶然の事象であるのなら、そういう変化の途上にあるものの化石が、たまには見つかってもよいはずではないか？　しかし、ある種とある種との完全な中間型といえる化石はほとんど見つかっていないというのが、これまでの実情であるらしい。

もちろん、ある種とある種の中間と考えられる種の化石は存在する。だからこそ古生物学では、ウマとかゾウとか、その他の動物・植物の〝系統〟をたどってみることができるのである。けれど、それはすでに完成されたひとつの種であって、次の種へ変わっていきつつあるものの姿ではない。そういう怪しげなものというか、逆にいえば、進化のプロセスをまざまざと示してくれるものの化石は、まだ見つかっているとはいえないのである。

これはどういうことなのか、ぼくにはよくわからない。

変異途上の動物はいたか？

中間型というものは、実はありえないのだと考えることもできる。それは今日の種の間に、中間型がありえないことからも、当然予想できることである。現在の生物がそうならば、過去の生物についてもその点はおそらく同じだろう。むかしの生物はいいかげんにできていて、今の生物は緻密につくられているとは考えられない。だから、むかしはいくらでも中間型が生じ、そこから新しい種が生じていったという可能性は少ない。中間型の化石がほとんど見つからないのは、そのような中間型は比較的個体数が少なかったので、化石になる機会も少なかったからだ、という考えもあるが、むしろそれより、そのような中間型ははじめから存在しなかったのではないだろうか？

〝中間型というものはありえない〟というときに使われる有名な例のひとつは、耳のなかにある耳小骨と呼ばれる骨である。よく知られているとおり、哺乳類の中耳には、3つの耳小骨が連なっていて、耳の鼓膜の振動を内耳に伝える。そのときこの3つの骨は、音が大きくて鼓膜の振動が激しすぎたら、その振幅を減らして内耳が損傷を受けぬように、また音が小さすぎて鼓膜の振動がかすかなときは、逆に振動を増幅するように働くなど、実にうまくできている。

ところで、哺乳類の祖先は爬虫類である。爬虫類では耳小骨が1個しかない。残りのふたつはあごの骨の一部として、あごの関節を成している。

爬虫類から哺乳類ができるときには、いったいどのようなことが起こったのだろう？　そこに中間型というものがありえたであろうか？　もはやあごの関節でもなく、しかも耳小骨でもない骨をもった、変化の途上の動物というものが考えられるであろうか？「進化はワンステップで起こったにちがいない」と、あるフランスの生物学者はいっている。――「なぜなら最初の哺乳類は、耳小骨が完全に耳のなかにおさまるまでの何万年もの間、ものをかむあごの関節もなく、またつんぼでいるわけにはいかなかったからだ」

確かにこのような場合、中間型というものはとても考えられない。そして、詳しくみていくと、こういう例は決して少なくないのである。

5本指と3本指のウマ

けれど、生物界の現象をあまり神秘化することはよろしくない。比較的単純な原因で起こっていることがわかる場合も少なくないからである。

たとえば、有名なウマの進化の過程では、5本指から3本指、そして現在の1本指というように変化が進んできた。最初第1指（親指）と第5指（小指）がなくなり、ついで第2指と第4指がなくなって、第3指（中指）だけが残ったのである。なぜ第2指が1本だけ残らなかったのだろうか？　第3指が残ったほうが適応していたのだろうか？　どれが残っても同じような気がするが……。

ある実験発生学者がこんな実験をやってみた。発生しつつあるニワトリの卵にX線を照射して、胚に傷害を与えるので

カラーページ解説

＊ ――→

ず，あしでけらないと貝が落ちないのかもしれない。

メダイチドリのゴカイとり

河口の干潟でえさをとっているメダイチドリを観察しているとよくゴカイをとっているが、その方法がおもしろいし、じょうずでもある。土の表面でゴカイをくわえるまでは実にすばやいが、その一方の端をくわえてひっぱり出すときにはとても慎重で、急にやればゴカイが切れるのを知っているように、そろそろと引きだす。ゴカイは糸のように長く細くのびるが、切れないで土のなかから出ると、ぴょんと縮んでチドリのくちばしの先端にまつわりつき、ぴんぴんはねる。メダイチドリはいかにもおいしそうに食べてしまうが、何回やってもゴカイを切ることがないのには感嘆した。他のチドリやシギがどうなのか知りたいと思う。

木の枝にとまるキアシシギ

鳥類のすぐれた野外観察家であった榎本佳樹氏によれば、秋期や春の渡来期のはじめには干潟や堤防外の石を休み場所としているキアシシギは、5月上旬になると堤防内にはえているマツの枝によくとまり、人が徐々に近づくと枝から枝へ逃げるのが常で、この習性は晩春北方へ渡去するまで変わらなかったという。わたしはその光景を目撃したことはないが、海岸に流れついた木の枝に数羽のキアシシギがとまっている写真を見たことはある。榎本氏はこのマツの枝にとまる習性について、さらに次のように述べている。

「本種はシギ類のなかでむかしから多かった種類であったにもかかわらず、その繁殖状態が未知のままになっているのをみると、あるいは他のシギ類と違い、樹上に巣をつくるような意想外の習性があって人に気づかれずにいたので、繁殖習性が不明であったのではなかろうか。またそれによって人間や獣類などの妨害からのがれることができたため、生存数も多かったのではなかろうかなどの想像も起こるのである」

この文が書かれたのは1942年のことであり、当時はキアシシギの繁殖状態は不明であった。そのキアシシギの巣がはじめて発見されたのは、それから17年後の1959年、東北シベリアでのことである。この巣は、榎本氏の想像と違って、地上のへこみに草を敷いた、他のシギ類と同様のものであった。しかし、このような楽しい想像ができるのも、野鳥を観察することの楽しさのひとつであろう。

なお、繁殖期に巣の近くの木の枝にとまって鳴いたり警戒したりするのは多くのシギ類に見られる習性で、日本においてもオオジシギ、アカアシシギ、イソシギで観察されているし（本号の表紙参照）、繁殖地におけるキアシシギが木の枝にとまって鳴いている写真もある。榎本氏の観察例は、繁殖期が近くなったので木にとまる習性が顕著になったものかもしれないが、渡りのときにも枝にとまることが頻繁にあるのかどうか、他のシギ類のことも含めて、わたしには興味ある問題と思える。■（日本野鳥の会理事）

イラスト・筆者



ある。ある強さのX線を照射された卵からかえったヒヨコは、肢の第1指と第5指がなくなっていた。さらに強いX線を照射されたものでは、第2指と第4指までなくなって、第3指だけが残っていた。つまり、ウマの肢の指に起こった変化の順序は、指の消失のしかたについての何か一般的な性質の反映にすぎなかったのかもしれないのである。では、なぜそのような性質が一般にあるか？　と問かれたら、それはまだわからぬと答えるほかはない。

いずれにせよ、問題にしたいのは次のようなことである。それは、はじめ5本指の種がいたが、のちに3本指の種が現われたことは確かであるとしても、それは5本指の種がしだいしだいに変化していって（つまり第1指と第5指がしだいに短くなっていって)、ついに3本指の種になったのではない、ということだ。5本指の種は、5本指のまま何万年にわたって生きつづけていたのである。そして新たに出現した3本指の種は、おそらく最初から3本指であったのだろう。

このように考えてくると、自然淘汰がどのように働くのか、よくわからなくなってくる。淘汰というものがあることは理解できるが、ひとつの種のなかにいろいろな変異個体が現われて、そのなかでよいものだけがしだいに優勢になっていき、ついにそれが新しい種になる，というようには必ずしも考えられなくなってくるのではなかろうか？

適応・不適応の基準は？

自然淘汰というのは，本来，適応という概念と結びついている。この適応ということばが，また，きわめてあいまいなようにぼくには思われる。「ある動物をその生活場所で見るかぎり，その動物は確かによく適応している。それは，適応していないものは淘汰されて消滅してしまったからだ」。このいい方は，科学としてはどうも無責任なような気がしてしかたがない。あまりちゃんとした説明にはなっていないように思えるからである。

ふつう，適応というと，鳥のくちばしとか肢の形，あるいは昆虫の口だとかコウモリのつばさ，その他いろいろなからだの構造が例にあげられる。しかし，スズメの短い肢が適応の例にあげられることはない。けれど，スズメはちゃんと〝適応〟して生きている。あの短い肢はむしろ不適応なのかもしれない。むしろスズメは，両肢を交互に動かすという陸上脊椎動物の運動の大原則に違反して，両肢をそろえてチョンチョン跳ぶという変な歩き方を発明したからこそ，短い肢で生きていっているのではなかろうか？

もしそうだとすると，適応・不適応は構造そのものでなく，構造とその使い方を合わせたものについていわれるべきことになる。となれば，今生きているものは，すべて適応しているといわざるをえない。そして，かつて生きていたものも，少なくともそれが化石になって残っている以上，何万年かにわたって生きていたことは確かだから，やはり適応していたのであろう。すると，進化とはあまり適応していないものからより適応したものが生じてきた過程ではなくて，適応しているものから別のタイプの適応をしているものが生まれてきた過程だということになってしまう。

いや，そうではなくて，それまでは適応していたものが，気候の変化によって不適応になったから，新しい気候により適した者が生まれてきたのだ，という考え方もある。もちろん，これは大いにありうるし，そのような場合も多かったろう。しかし，進化が気候や地球上の状態の変化だけで起こったとは考えられない。

想像をめぐらしてみれば，いろいろなことが考えられる。そして，いろいろな場合に，適応・不適応で進化を考えていくのは楽しいことだ。けれど，それによってわれわれは進化という巨大な現象をはたして理解できるのであろうか？

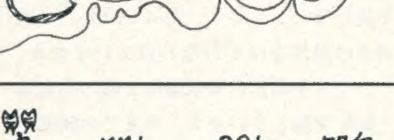
前にも述べたとおり，ひとつの種というものは，はじめからきちんと決まったプログラムに沿って生きていく，きわめて〝前成的〟なものである。ところが進化とは，もし神学的に考えるのでなければ，なんの予定されたプログラムもない，まったく〝後成的〟な現象である。進化を理解するとは，この矛盾したふたつのものがどう矛盾なくかみあうかを説明するというたいへんな仕事なのだ。■

（東京農工大学教授）
イラスト・重延璎子



漢字のふるさと　74

藤堂明保



鸚鵡（おうむ）　日本で呉音読みをしたのがオウムということばだが，天台宗の漢音読みをするお経ではエイブという。中国の南海からベトナムにかけて産したが，中国の古典にも，鴝鵒（クヨク，いまの九官鳥）とならんで，「よく人言をなす」といって紹介されている。奈良朝のころ，日本に伝わった。

さて「鸚」は「鳥＋嬰」からなる字である。「嬰（エイ）」の字をよくにらんでみれば，「貝印＋女」の組みあわせであることは明白だろう。それは何だろうか。女の子が貝がらをひもでつらねて首のまわりに巻く，あのアクセサリーのことである。

だから鸚とは，「首のまわりに首飾りを巻きつけたような鳥」ということだ。オウムの羽は多彩だが，なかには首巻きをしたようなくび毛をもっているものがいたのだろう。だがその反面では，上くちばしは鋭く曲がり，目もきびしい。だから「武（たけだけしい）」をそえた鵡という一語をそえて，「鸚鵡」と呼んだのである。■



早春のチョウ

〈問〉春になるとチョウがでてきますが，チョウたちはどうして春を知るのですか。

（小平市・谷緑・11歳・小学生）

〈答〉春になるとカエルやチョウが現われます。しかし春がきたことをどうして知るのでしょうか。これはむずかしい問題で，種類でも違います。

ただ一般的にいえば，気温がしだいに高くなると同時に日の長さがのびてきて，そのことがいままで冬越しをしていた生物を眠りからさまし，活動できるようにするといえましょう。とくに日の長さが，昆虫をはじめ多くの生物にいろいろな形で変化をもたらす大きな刺激になっていることが最近の研究でもはっきりしてきました。


羽化直後のアゲハチョウ

さなぎで冬越しをしていたチョウが羽化するのも，実はさなぎが一定の間寒さに触れていることが前提になり，そのあとでしだいに気温が高まり日の長さがのびているのを感じ，それに応じて出てくるのです。日の長さの変化は体内のホルモンの分泌をうながし，これが羽化につながります。

モンシロチョウ出現の時期

ところで春というともっとも身近なモンシロチョウを連想されるかたも多いでしょう。あなたはことしモンシロチョウを見たでしょうか？　実はこうした全国調査は意外なほど行なわれていません。そこで３年前から多摩動物公園の昆虫園で毎年実施しています。今までの状態をまとめてみると，日本でいちばん早い時期にモンシロチョウが現われるのは九州と四国の南部，とくに太平洋に面した所で，昨年の場合は１月の下旬にすでに姿を見せています。次に現われる場所は本州の，山口県から茨城県までの南に面した平野で，２月下旬までにあちこちで姿を見せます。３月上旬にはいると中国地方の日本海側と東北地方南部の太平洋側，中旬には近畿地方の大部分と中部地方，および東北地方にひろがり，北海道の函館地方でもその姿を見ることができるようになります。

３月下旬から４月上旬は東北地方の日本海側と北海道の南部に記録が集中し，４月中旬以降は北海道の各地から報告がありました。そして昨年，日本でもっともおそい発生地は北海道の釧路地方の５月６日でした。南北に長く地形の入りくんだ日本列島では約４か月かかってモンシロチョウが日本をおおうことがわかりました。ただそのひろがり方は単に南からではなく，太平洋側のほうが早く，しだいに日本海側へ移行しながら北へひろがっていくといえます。

なぜモンシロチョウをはじめて見た日をくわしく調べているのかといいますと，実はこれでその年の春の訪れ方がわかるのです。モンシロチョウは飼育してみるとわかりますが，さなぎが羽化する第１条件は気温で，日の長さはあまり関係がないのです。

したがって同じ場所でも年によって発生が早くなったり，おそくもなります。たとえば一昨年，東京都内でもっとも早い記録は２月28日でしたが，昨年は２月14日でした。これは春先の気候による影響なのです。さてことしはどうでしょう。ひとつみなさんもモンシロチョウに気をつけてみてください。

春のチョウたちの観察

春を告げるチョウにはまだいくつかあります。モンシロチョウによく似たスジグロチョウがタンポポの花にとまっていることもあります。それと前後して現われるのがミヤマセセリです。茶褐色ですばやく飛ぶこのチョウは，クヌギやナラの林に多く，ときどき地面にとまってはねをひろげていることもあります。

同じころ，やはり雑木林でわずかに若葉がふくらみ始めたあいだを縫うように飛ぶのがコツバメです。このチョウもはねを立ててとまると茶褐色で目だちませんが，はねの表は美しい青色でいかにもシジミチョウらしいかわいい種類です。林のあいだの道をいくとひらひらと舞いたち，ガマヅミやツツジのつぼみなどに産卵するのが見られます。各地からサクラの花だよりが聞かれるころ現われるのがツマキチョウです。前ばねの先がとがっていて，雄はその先の部分がオレンジ色，雌は白く，大きさはモンシロチョウよりひとまわり小さい種類です。

はねを細かく動かし，キイチゴやダイコンの花にやってきますが，長くとまらないので意外に生態写真のとりにくい種類です。昨年の春，わたしはこのチョウを１日じゅう観察しましたが，おもしろいことに気づきました。はねの裏に細かい黄色と黒の鱗粉があって，離れてみると緑色の斑に見えます。観察していたのはコナラの林でしたが，ふとチョウが見えなくなってしまったのです。どこにとまったのかしばらく捜しましたがわかりません。再びチョウが飛びたったのでわかったのですが，なんとのびはじめたナラの若葉のあいだにいたのです。はねを閉じてとまったところを横から見ると，先がナラの若葉と同じようにとがり，しかも緑色に見えるのでちょっと区別がつかないのです。


ナラの若葉にそっくりなツマキチョウ

さてはこのための保護色かと思わずにはいられませんでした。幼虫はたんぼに多いタネツケバナやヤマハタザオの葉を食べて育ちますから観察も容易です。

このツマキチョウに近いクモマツマキチョウは中部地方の山岳地域に分布し，標高2000メートルくらいまでにも見られる美しい種類で，山麓では４月にはいると現われますが，最近は乱獲されてその数は激減しています。

採集についての問題点

減ってしまったといえば〝春の女神〟といわれるギフチョウとヒメギフチョウもその代表的な種類でしょう。

不幸にして早春に発生する美しいこのチョウは，他の種類に先がけたために，そしてあまりにも美しいためにねらいうちされているといえます。ふわふわと上昇気流にのって斜面を舞う姿は実に優雅ですが，だからこそ採りやすいのです。

ある有名な産地でのできごとですが，県の天然記念物に指定したという標識の前に網をもった数人の中学生ががんばっていました。それから少しいった場所にも同じようなグループがいました。わたしはその人たちに，採集についてどう思うかと問いかけたのです。その場所は県が採集禁止に指定した所だということは全員が知っていました。しかしみんなが同じようにこういうのです。「もしボクが採らなくてもだれかが採るに決まっている。だからボクも採るのだ……」と。

わたしは採集についてとくに昆虫を知るためには全面的に禁止するのはおかしいと思っている者のひとりです。みずからの手でそれを得，よく調べてこそ正しい認識が生まれると思っています。しかし，禁止された場所で採ったり，必要以上に集めて，単に採集欲だけを満足させるいき方には反対です。


乱獲で減ったヒメギフチョウ

ひとりひとりが自覚せず，ルールを守らないで，人にとられるからといっていたのでは昆虫採集人口が多くなりつつある現在，日本じゅうのギフチョウを全部採集しつくしても足りないはずです。

そうでなくても開発という破壊が各地で起きていて，自然が限られ，せばめられているのです。わたしたちの自然は次の世代のための自然でもあるはずです。

採る人がそれをどこまで調べるのか表面的にはだれにもわかりません。でもそれを決めるのは採る人自身であり，その人は自然のバランスの維持に責任を持つくらいの見識を持つ必要があります。

たがいに非難しあい，妙ななわ張り意識で論争しているうちに，自然や昆虫の価値などわからない人たちのブルドーザーが，根こそぎ何もかもなくしてしまうほど現代は急激に変わりつつあります。

ほんとうにギフチョウを守るためには，チョウを愛する者が協力する以外にはないと思います。■

（多摩動物公園昆虫飼育係長）

裏表紙説明

ヒヨドリ　ことしもそろそろ各地から花だよりの届く季節となった。だが，あらゆる非難にもめげず相変らず建設のつち音かしましいこの国に，〈季節〉などほんとうにあるのだろうか？　それは管理された自然のなかで咲く花についての情報が，時の移ろいとともに生みだす擬似的な季節〈感〉でしかないのではないか。そして，そのことを気づかない人間の鈍感さをあざ笑うように，寒中にサクラが狂い咲き，ヤナギが芽を吹く。

ところで，このヒヨドリはもともと季節のあいまいな鳥ではある。年じゅう日本にいるのだが，繁殖期には山地の樹上で生活し，冬には平地に漂行する。そのため都会では冬鳥といい，山地では夏の鳥だという。しかも俳句では秋の季語となっているのだ。これは，秋に大きな群れをなして移動し，「ヒーヨ，ヒーヨ」と鳴き騒ぐので，よく目だつからかもしれない。赤い果実が大好物だが，サクラやツバキの花の蜜を吸うことも多い。■

撮影　伊藤信男

次号予告
3月14日発売


ワニチドリ

世界動物百科
104号　3／25

カラーページ

チドリ亜目
- セイタカシギ科　セイタカシギ　ソリハシセイタカシギ
- ヒレアシシギ科　アカエリヒレアシシギ
- ヒバリチドリ科
- カニチドリ科　カニチドリ
- イシチドリ科　イシチドリ
- ツバメチドリ科　スナバシリ，ワニチドリ　ツバメチドリ
- サヤハシチドリ科

私たちの仲間

自然と人間 1 人は桃源郷を捨てていく	編 集 部
森のなかのにおい アマゾン動物記 16	伊沢紘生
日本のシギ・チドリ類 3 カラーページ解説	高野伸二
生きものの世界への疑問 9 系統樹の幻想	日高敏隆
漢字のふるさと 75 鸚哥（いんこ）	藤堂明保

第65号～第128号(鳥類)のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号(概説・哺乳類)のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03―212―0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06―231―0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1―12―1 〒802
TEL. 093―531―1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1―3―3　〒460
TEL. 052―231―8131

世界動物百科　通巻104号　昭和48年3月18日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京 大阪 北九州 名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ヒヨドリ　　説明30ページ

雑誌0633－3／10